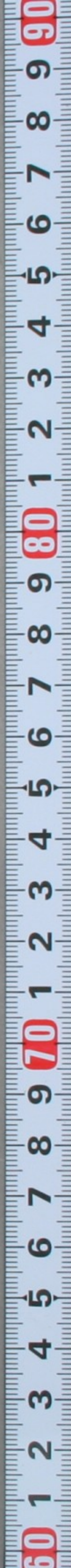


圖畫

和漢船用集

三

特別
△ 8
467
3



門 4 8
457
3



和漢船用集卷第三目錄

舟名數海船之部目錄

改池

天盤櫂樟船	葦舟	天鳥船
浮寶	垣土舟	熊野諸手船
天羅摩船	無目堅間小船	天船
抱船	神御舟	瑞籬御舟
大御舟	皇舟	掛鏡舟
齊別船	齊舫	枯野舟
四舶	能登	鈴舟
繪船	藻舟	櫻皮卷舟
伊勢船	唐船	鳥舟



銅船	貝船	雲母舟	越女舟	客與舟	白舫	青翰舟	玄武	鷓首	龍舟	鳧舟
鐵船	土船	螺舟	木蘭舟	清廣舟	鸚鵡舟	青雀舟	朱鳥船	翔鳳舟	龍頭	晨鳧
破鐵舟	金船	蠡舟	沙棠舟	採菱舟	鳴鶴舟	青雀舫	蒼雉舟	翠虬	翔鱗舟	鴨頭船

鴻毛舟	凌波船	華泉舟	樓船	餘艍	曜陽舟	鳴鶴舟	無極舟	太白船	草檉船	尖尾船
逐龍舟	挾電艦	桂舟	飛雲舟	紫宮舟	飛龍舟	指南舟	常安舟	太平舟	海滄船	高把稍船
鱖魚舟	拙頭船	舫船	黃茂船	升進舟	射獵舟	雲母舟	長安舟	大福船	艫船	大頭船

温麻五會

書畫船

書畫舸

畫舸

鳳舸

單舸

輕舸

金舸

弘舸

大舸

一舸

舩舸

走舸

撞雷舸

凌風舸

舸

自貳挺立
至拾挺立

五手船

小早船

自拾貳挺立
至四拾挺立

關船 自四拾貳挺立
至八拾挺立

二人漕

御召御座船

御召替舟

引船

漕船

臺所舟

納戶船

小荷駝舟

馬舟

水船

巡船

半垣作

擲干造

閑浪船

蒼山船

叭喇唬船

十漿船

八將木船

打擢舟

枝船

車船

千里船

早鳥船

屋姆絲

古路舟

赤馬舟

大紅船

畫船

狹丹塗船

赤羅小舟

赤曾保船

伊達小早

鯨舟

喪船

吊使船

賀使船

和漢船用集卷三目錄終

和漢船用集卷第三

金澤兼光編集

舟名數海船之部

天盤椽樟船 アライハククス 伊弉諾尊 伊弉冊尊所化生也又

鳥盤椽樟船 又天盤船と云万葉

石舟 岩舟

夫本 カミヤク 神山又天の思ふかたに下りてく椽系をたもつる所の也

葦船 アシ 蛭兒を載る流の舟也

天鳥船 アマトリ 高皇靈尊所令將造也

浮寶 ホウ 素戔鳴尊所教也

垣土舟 ハニツチフネ 素戔鳴尊所築也

熊野諸手船

大己貴尊使者所乘也。是本邦早舟の始也。又天鵠船と名付。

天羅摩船

少彦名命乘處。

無目堅間小船

又无目勝間と申。塩土老翁所造。而天孫火出見尊を乗たてまつりし舟也。

ゆきくろく公侍く。此海をくふ月を望るを造る。これ舟也。

以上八名神代の舟として本邦船の始也。委上卷より也。

天船

倭姫命天照皇太神を載奉て尾張國中島宮より遷。まゝまの村美濃國縣主角鑄御船二隻を作て捧く。

天船者天之曾已立抱船者地の御都張とまゝしてなす。

抱船

注上より云へり。

神御舟

神代の舟と云へり。又推古天皇の内宮安養の園。恩賀の舟は紅帆の舟あり。船中子籠と籠の中より。

神と云ふ未弊を云へり。二女あり。是嚴島大明神也。と云へり。又新後撰の公八日吉山王を御あると云ふ。

神樂幸徳の由縁所は海に流る。とよめる。舟へり。或ハ松州流むと云ふ。文の系被六月廿二日。松川筋船の事。

烈ありけ。神樂舟を云ふ。と云へり。

新後撰 幸徳やきよと云へり。八にこきり。神の舟はこれなり。と云ふ。

瑞籬御船

吳竹集に曰。孝徳天皇をふとの文より。舟なり。多し。舟橋のり。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

り。舟あり。と云ふ。舟万葉集十八。又後載集に。大空

所舟とあり元正天皇とハ七十余年以ちたれハ孝徳天皇
とすハ其竹葉のたやまりたる人ハ藤原天皇とすハ其の
あひよんとあり

元正天皇新波の文舟おまゝ一より
鏡子載 堀江の玉志りまゝとあり其れ舟とありてありせハ
井上大臣

大御舟 ヲホミフネ 万葉の臣小季吟白大御舟ハ其の舟也
いり大御舟也今大御舟と云ふは

皇舟 ミフネ 神武天皇東征の舟序奏よとあり又王舟舟也
書元正天皇舟船以綱手浜江遊宴之日作れる歟

萬葉 堀江より水尾りハ其舟也とありてハ川のせりせ

掛鏡舟 カミミラカゲシフネ

うらと傳也ハ日公池はゆき事と云ふはたハ一りて是
水におよび伝ゆる人ハ其のゆきといふハ一りては

日本紀曰景行天皇十二年八月乙未朔己酉筑紫幸九
月甲子朔戊辰周芳の婁磨はつ時天皇南とこそありて
羣卿は伝してのしまはく南ある煙をさるる必賦は

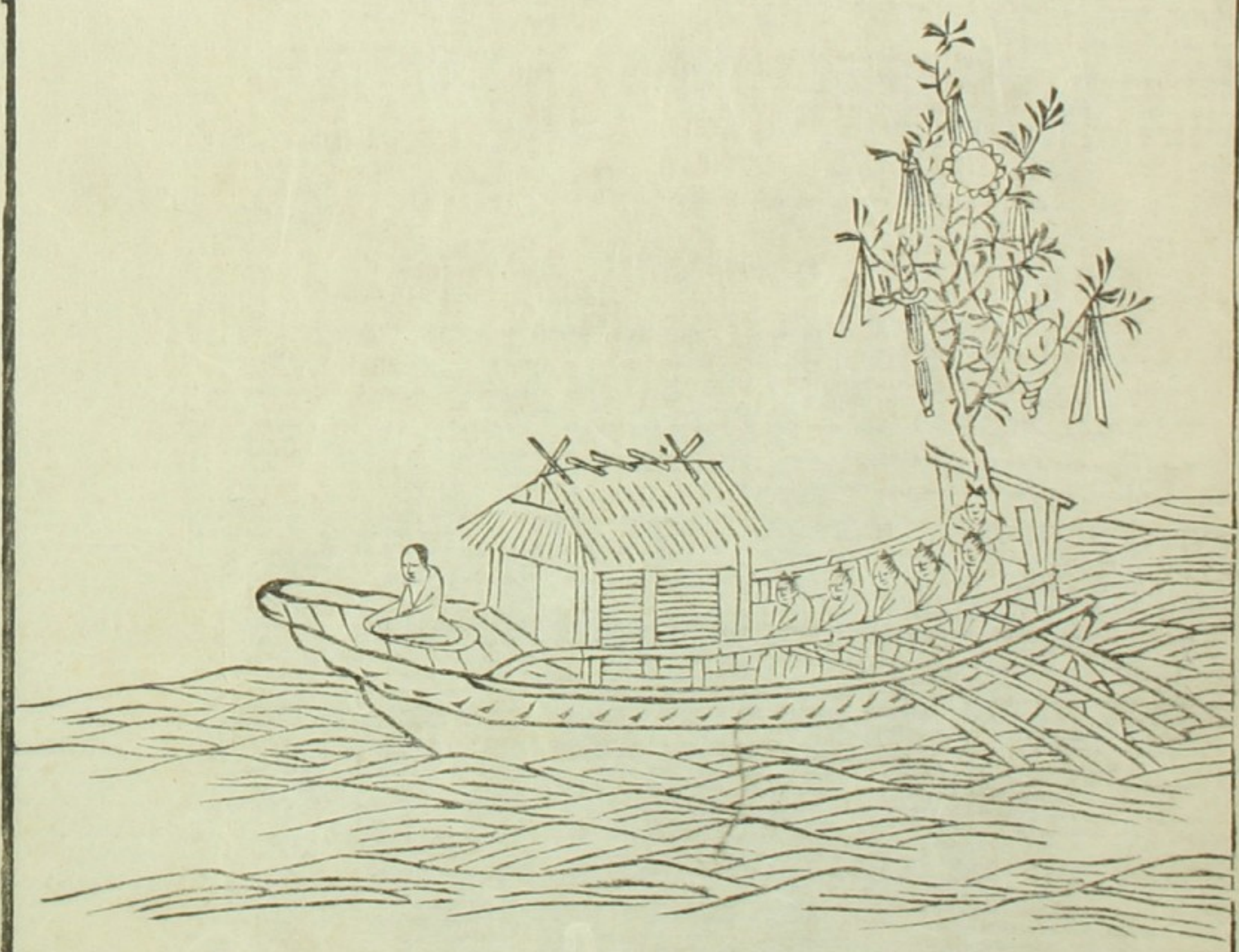
菟名手物部之系祖夏花を遣して其状を記せしむ
及女人五神夏磯媛といふ其位眾甚多二國

神夏磯媛之船



の冠師也ヒトリカミ天皇ミコ使ツカサシ者モノありとて別磯津山サカサキの賢本サカキを
 披ヒキ上ノ枝エはハ八ヤツ握カ劍ツルを掛カケ中ナカ枝エはハ八ヤツ咫ツル鏡カミを掛カケ下シモ枝エはハ
 八ヤツ咫ツル鏡カミを掛カケ亦モ素ス幡ハタを舩フネの舩フネは樹キ系ケ向ムカ々々啓ヒラて曰イハ死シハ
 我ワ屬トモ親カタラ必カナラ違ヒ々々今イマ將ニ歸ル德トク多ク
 日本紀第八曰仲哀天皇八年春正月己卯朔壬午筑紫ツクシ以幸ニ
 の時トキ置オケ縣ノ主ノ熊クマ罽カシ天皇乃車駕ミユキを定サて豫アラカ百枝ヒヤクササの賢本サカキを披ヒキ
 五イ尺ツク尋ノの舩フネ比ヒ舩フネは立タ上ノ枝エはハ白銅鏡ヒロクワガタを掛カケ中ナカ枝エはハ八ヤツ咫ツル鏡カミ
 を掛カケ下シモ枝エはハ八ヤツ咫ツル鏡カミを掛カケ用ヨウ芳ホウ沙サ歷レキの々々々々小コ多タ迎ムカヒ
 同紀曰筑紫伊觀縣主祖五十迹手天皇の仍ニを定サて
 五百枝の賢本を披五尺の舩比舩は立上枝はハ八咫鏡を
 掛中枝はハ八咫鏡を掛下枝はハ八咫鏡の劍を掛穴門

正縣主之船



引^{ヒキ}子^シ系^{ケイ}迎^{メイ}く^ク乞^キと^ト獻^{ケン}を

齊別船

古事紀曰神祇荒魂奉齊別船亦以和龜齊^ニ皇后^ノ船師領船軍從和珥津解纜^ト

齊舫

通鑑梁紀曰主者求堅船以為^ト註胡三省曰以船載齊庫物因曰^ト

枯野舟

日本紀曰應神天皇冬十月科伊豆國令造船長十丈船既成之試浮于海便輕浮疾行如馳故

名其船曰枯野^ト

由^テ船^ノ輕^ク疾^ク名^ニ枯野^ト是^レ義^ト違^ヒ焉^カ若^シ謂^ハ輕野^ト後人訛^ル歟

古事紀曰仁德天皇御代免寸河之西有一高樹其樹之影當且日者逮淡道島當夕日者越高安山故

伊觀縣主之船

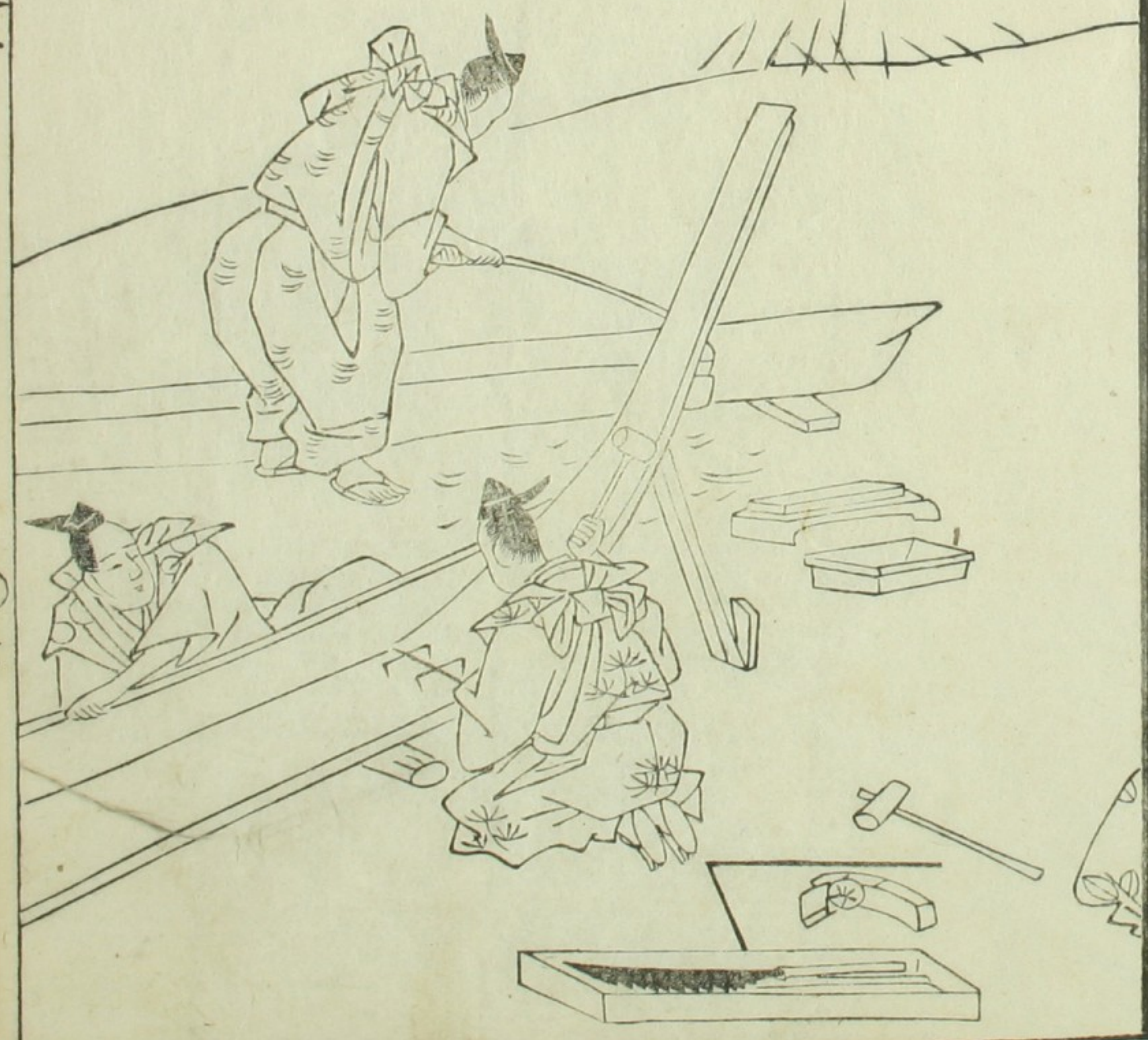


切是樹以作船甚健行之船也時号其船謂枯野故以是船且夕酌淡道島之寒泉獻大御水也

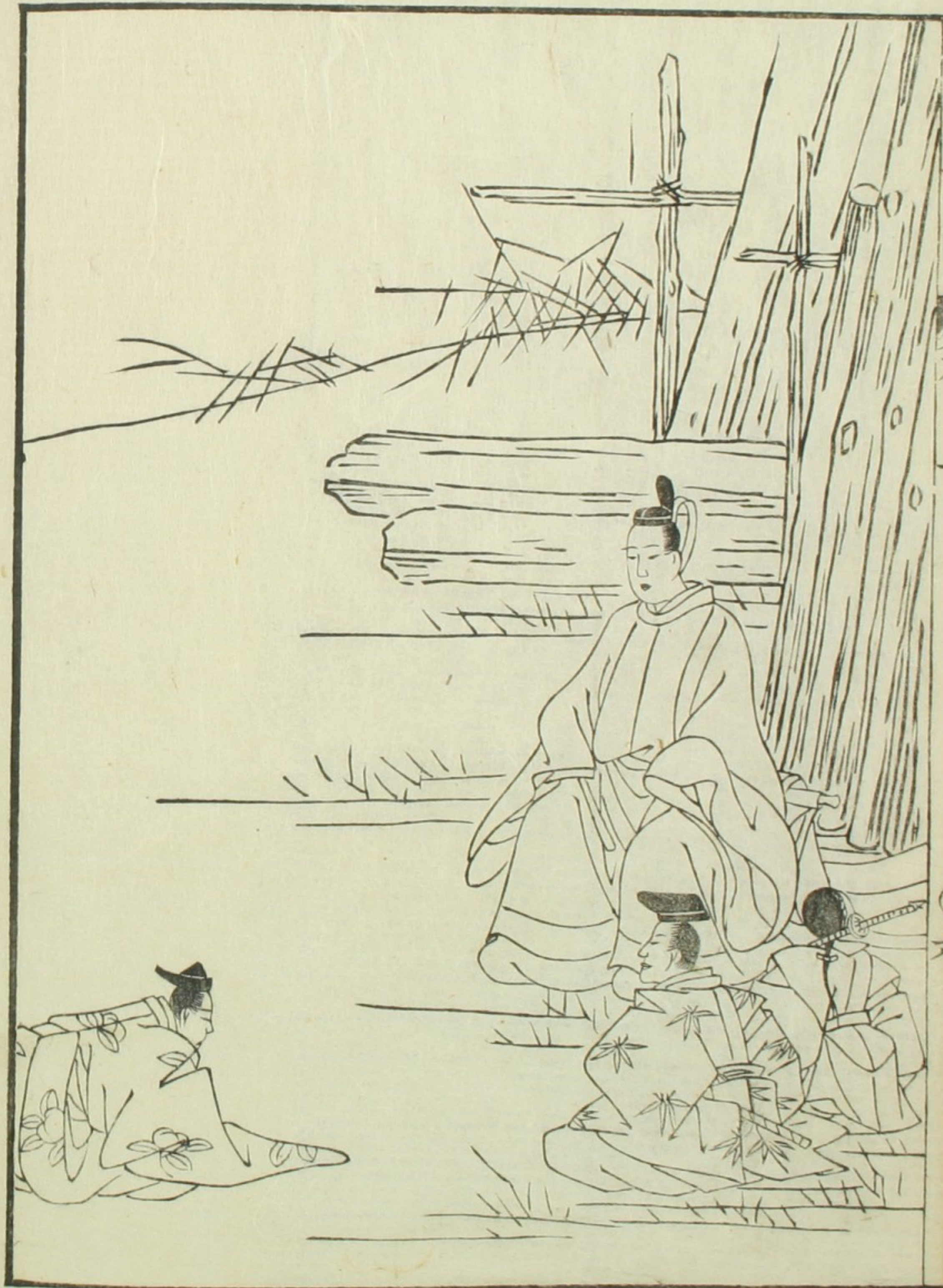
日本紀曰應神天皇三十一年秋八月詔群卿官船名枯野者伊豆國所貢之船也是朽之不堪用然久為官用功不可忘何其船名勿絕而傳後葉焉群卿便被詔以令有司取其船材為薪而燒鹽於是得五百籠則施之周賜諸國因令造船是以諸國一時貢上五百船悉集於武庫水門

日本紀曰古事記の流傳代と國とのお遠りとも枯野と云ふ此船ハ甲ノ匠又種々疾放枯野と云ハ後遠り又種々と云ハ後人の記と云々ハりとも其利クリ

枯野之船



中莫公月集



舟遊集

〃〃〃〃十月は造りしめ給ふは枯野は佐の舟なる也
 〃〃〃〃八名舟給ふはし應神の所代の所代の所代の所代に徳小傳人給ふも
 又えを又二代の枯野船と云ふも又八代何れは是れなり
 〃〃〃〃成志と云ふ又世舟壱乃新として壱二百餘と成志と
 法園は船と云ふ又百餘と貢法といふは船の長さ十丈と云ふ
 〃〃〃〃今云八十挺立ふは船に枯野船ありて船長とつくす
 〃〃〃〃海船又百餘ありと云ふは船の船と云ふは壱
 〃〃〃〃一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱
 壱一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱
 〃〃〃〃今云八十挺立ふは船に枯野船ありて船長とつくす
 〃〃〃〃海船又百餘ありと云ふは船の船と云ふは壱
 〃〃〃〃一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱
 壱一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱
 〃〃〃〃今云八十挺立ふは船に枯野船ありて船長とつくす
 〃〃〃〃海船又百餘ありと云ふは船の船と云ふは壱
 〃〃〃〃一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱
 壱一船と云ふは船の長さ十丈と云ふは船の船と云ふは壱

け爐ヤのこりコトれ本ツクをツクつ造りしめ其音七黒ひびく
 とらんへり

四船シバク 八雲舟抄云唐使の舟なり遣唐使ハ大使副使判官
 主曲シユキョクと云ふは唐人の使りなり舟曰艘セウと云ふは舟なり

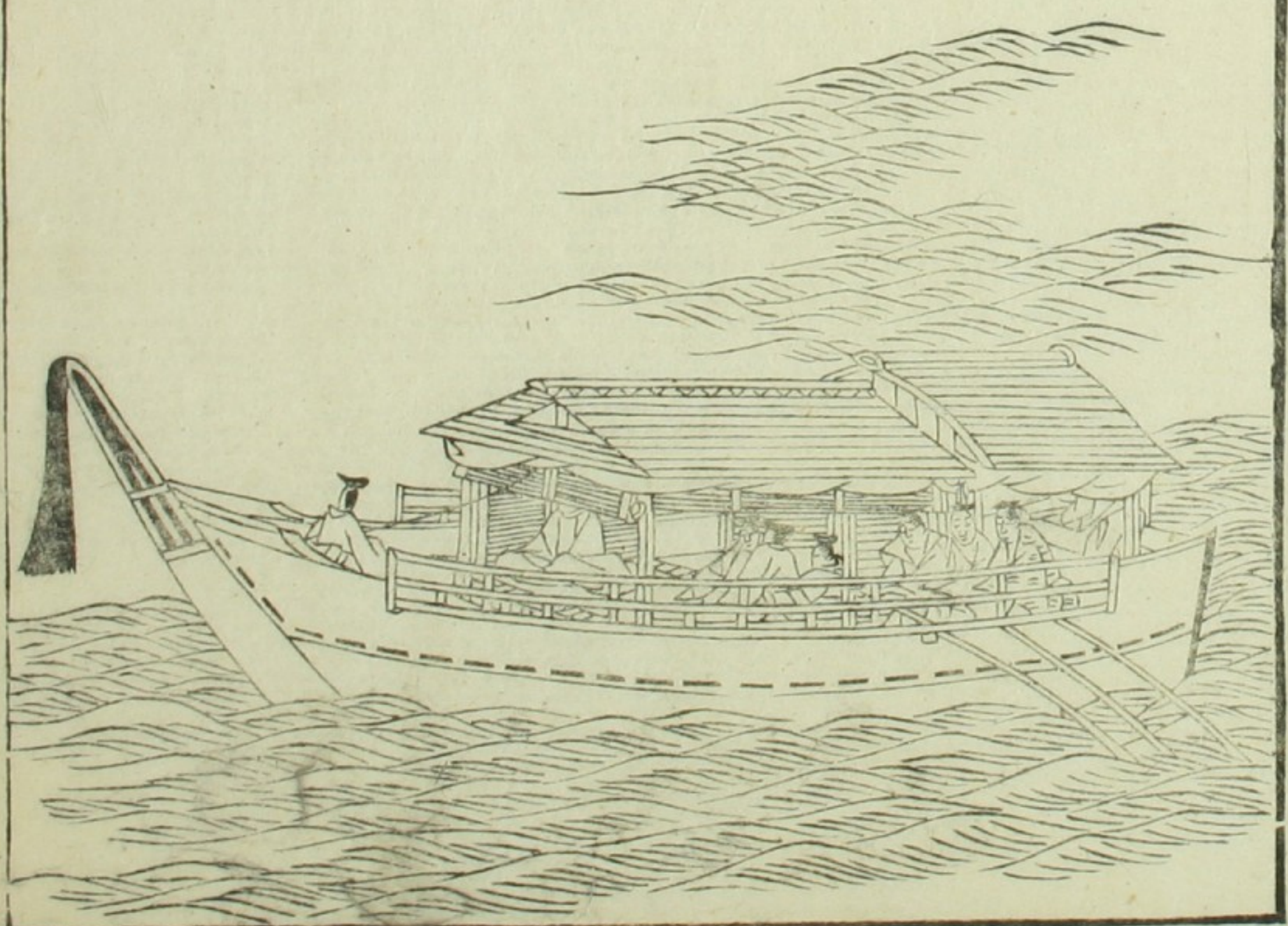
能登ノト 舟名曰能登
 後日本紀曰廢帝朝天平寶字七年初遣高麗國
 船名曰能登

鈴舟スズネ 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり
 舟は鈴と云ふは源氏須磨へおひびき給ふ舟なり

大船と小船とを拍子と棹の音を強又強とくくこと海舟
 の船ともは舳の方また棹太棹子船をうけ船と船
 のあへとりとをとりて面楫と楫とを楫とあへたり
 大船と船より舳へ舳のさうさうゆへなり又大船あり
 ねとも老人のさたさうなつとさうかへさう者や
 船舟とよせらる波よおとさきて瀬磨の上世ふき立たり

信橋歌取

鈴舟



伊勢船

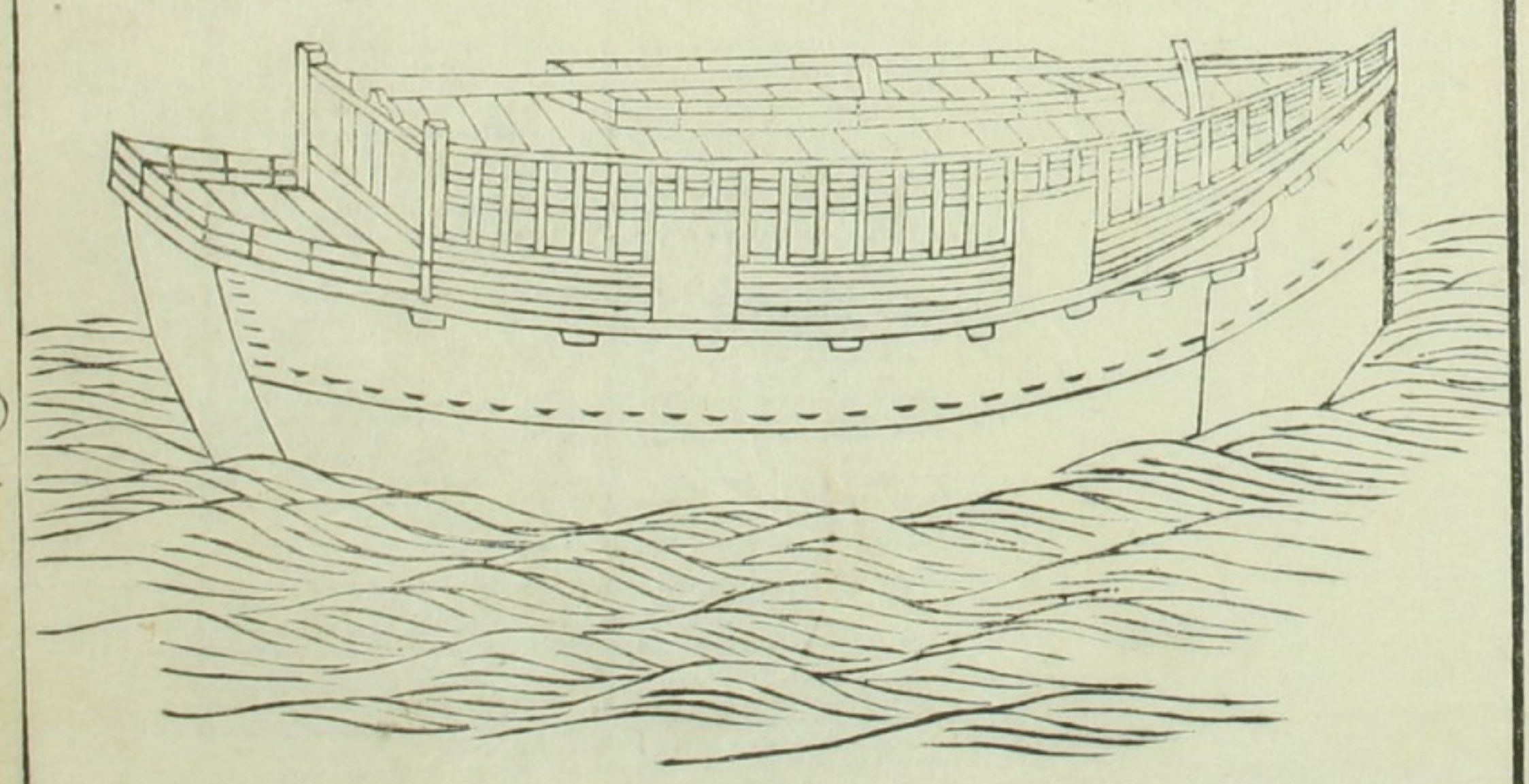
藤垣まよいせ舟との湊江よよめりといり又
 伊勢舟の名舟法要略よふくしり伊勢の国名
 と呼ぶるし本邦古昔の舟也故よ俗親舟と存又
 強れ船は縁のあ押しとくりささく船並なりこの
 故よ表船造りよさると吾書表と云水押の船ニツツ
 ゆへ二船ともいり又別の割二船ともいり海船
 の故よとるん

夫本

垣むらとの湊江に於てとまりいせ舟

光俊船長

伊勢船



新編海防集 卷之三

唐船

中華の舟と云今も倭より南東航と云
海の航号より明列の舟より保平益義記
小大の舟航に幸するよりいり是の舟航造りよ
志すると云今も 舟の儀の舟航造り乃
舟航より又孫念三代將軍實録の舟航造り
陳和卿と云者其より中法より漢唐の大舟と
造らしむ舟航造りはと云り後といり彼舟
舟航の堂儀如監と云家大工の棟梁と云りより
て又舟航陳和卿も佛師と云舟航造りより
と云舟航造り漢唐の堂儀の造りより舟航造り
舟航の六陳和卿も舟航造りの棟梁と云り舟航造り

舟航造り漢唐の堂儀の造りより舟航造り

舟航造り漢唐の堂儀の造りより舟航造り

舟航造り漢唐の堂儀の造りより舟航造り

舟航造り漢唐の堂儀の造りより舟航造り

鳥舟

又へり 本邦神代天の鳥舟子何

張衡七命曰兼鳥舟為水戲注郭璞曰舟為鳥

形制今吳之青雀舫此其遺象也といり舟

白雪下鳥舟と云り 本邦彦火火出見尊飲企

都鄧利の涉源なる万葉略と云舟子何

和名公用集 卷之三

万葉
あきろ多鴨とりま舟はうりこそやの像ありけやく若こそ
夫本
うらふりなきよんはあきろ多鴨とま舟もはよる

晨鳥

注曰 卽青桐大船名
諸葛恪所造鴨頭船也

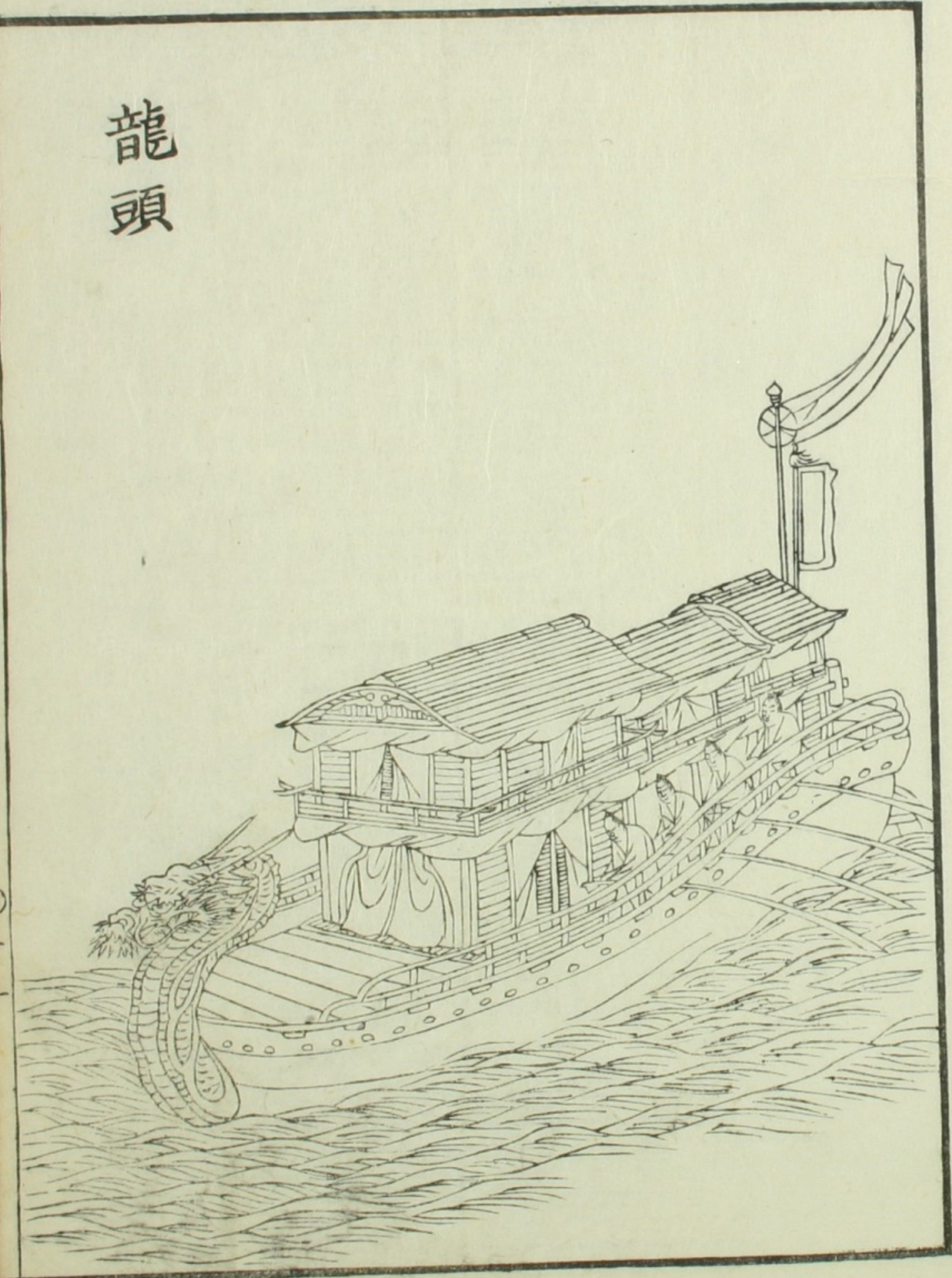
鴨頭船

吳志曰太傅諸葛恪
制為

龍舟

淮南子注曰龍舟大舟也刻為龍文以為
飾西都賦云登龍舟張鳳蓋建華旗注呂
向曰畫龍於舟雍門周曰水嬉則舫龍舟也陪煬
帝御龍舟幸江都舳舻相接二百餘里とんへり
天子の舟と又ふの制同名軍船の舳あり

龍頭



龍頭

下学集曰於江の船の名或ハ龍首と云と云
へり船の頭を龍と化る者漢書曰へり吳書
曰於江の船也懸鐘處也又西京賦曰龍首と云ハ此名
魏都賦曰龍首と云ハ殿屋上四角皆作龍形於椽頭也
本邦安宅丸と云舟龍頭作りのより因傳り

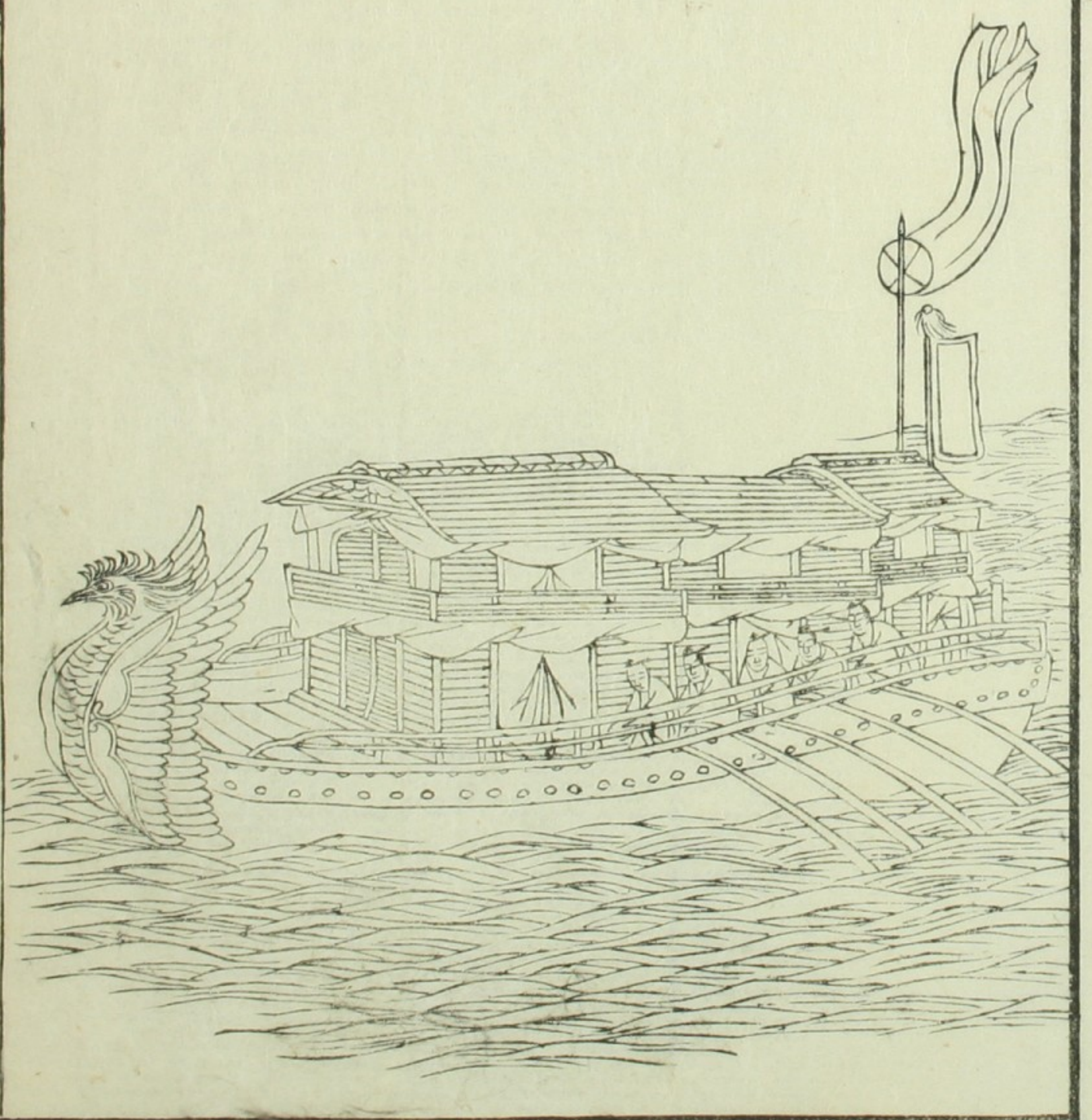
翔螭舟

階煬帝龍頭の船は御ま皇妃翔螭舟は女
皆鷓舟と云と云へり按り翔ハ龍也螭ハ似
蛟無角似龍而黃也其形を刻さる者

鷓首

浮鷓 畫鷓 文鷓 鷓舟並は同集韻曰鷓
首ハ天子の船也淮南子曰鷓ハ水鳥也畫
其象著船頭故曰一又西京賦注曰船頭象

鷓首



和漢船所集 卷之三

鷓鴣鳥厭水神故天子乘之揚子方言又曰船首或謂
 艦艚郭璞曰白艦鷓鴣鳥也今江東貴人船前作青雀
 是其像也故其名舟為艦船の次は鷓鴣鳥のくま
 と作るゆへは鐘先と艦と云と又へより下字集又曰
 之形と云く者ハ船として浪波は瀕々んと欲ん也
 陶季直京邦記曰西巡記曰宋孝武渡六
 合龍舟翔鳳以下三千四十五艘舟船之
 盛二代二京無比
 翠虬舟
 玄武舟
 傳穀落賦曰停清沼以泛舟浮翠虬與玄武といふ

朱鳥船
 蒼雉舟

以上二名其形を刻して他々の名也

青翰舟 鄂君方汎舟新波之上乘青翰之舟張翠羽
 之蓋會鼓鐘之音越人擁楫而歌
 青雀舟 王隱晉書曰陶侃擊蜀賊王真以鈎得上青
 雀舟

青雀舫 白氏長慶集又青雀舫と云くより今江東乃
 老人私のあは青雀と作る者
 白舫 劉濬自益州歸白舫百棹皆繡帆青簾多
 載妓女人呼為天上樓船

鸚鵡舟 蜀王本記曰蜀王有鸚鵡舟

鳴鶴舟

客與舟

清廣舟

採菱舟

越女舟

木蘭舟

沙棠舟

雲母舟

以上五名太液池の中よりと西京雜記に出

三體詩注曰有魯班刻木蘭為舟至今在洲

中詩家云一一出於此

山海經曰崑崙有沙棠木食其實不溺為

舟不沈銘曰安得沙棠木刻以為舟

雜記曰漢成帝以沙棠木為舟以雲母

飾鷁首一名雲母舟

螺舟

拾遺記曰始皇好仙有宛渠之民乘螺舟而至舟行似螺沈行海底水不浸入

蠶舟

同上始皇好仙有羽人乘蠶舟浮黑水而至者身長十丈編毛為衣兩目如電方耳出於頂間

顏如童稚

貝船

曹植擬楚詞曰愬流兮遠邁貝船兮

士船

世本云廩君名務相姓巴氏樊氏驪氏相氏鄭氏凡五性皆爭事鬼神以土為船彫文畫之而浮于水內約船浮者當以為君他姓船不能浮獨廩君船浮因立以為君長是本朝素戔鳴

多 京洛人垣士舟も同義

金船

瑞應園云王者德盛則金人下乘金船遊王後池
又同名軍船あり

銅船

交州記云安定縣越王銅船潮退則見又
陰雨日百姓樵採見銅船出水上

鐵船

淮南子曰鐵可以為船列仙傳曰鄭全福居
蓮華洞遊桃花溪有老人乘一一

破鐵舟

華山頂蓮華池有破鐵舟

鴻毛舟

洞冥記曰影娥池の中より一あり

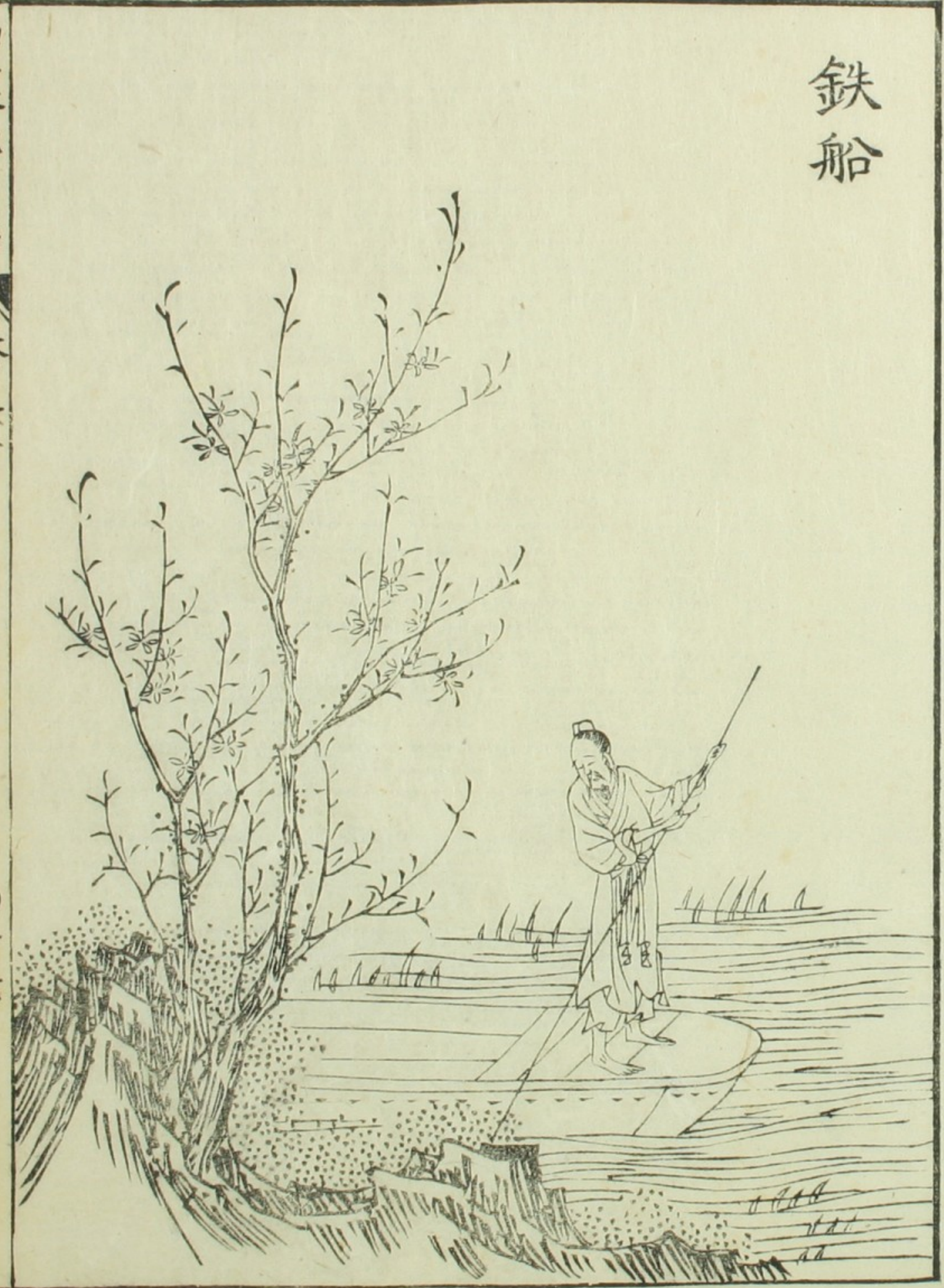
逐龍舟

日上虞池の西昆雲池有り方曰百步中一あり有

鯽魚舟

梁史曰天泉地より一と割以形授而長

鉄船



和漢三才圖會卷之三

凌波船

揆電艦

掘頭船

華泉舟

桂舟

船

樓船

二名洞真記曰昆靈池の中あり

幽明錄云陽羨小吏吳寵乘一過溪獲

五色浮石取之乃變為女自稱是河伯女

晉宮閣記云都亭池廣八十步中有一

屈平九歌曰吾乘兮桂舟注曰言己在湖澤之中

猶乘桂木之船注向曰乘桂舟迎神也舟用桂者取

香潔之異

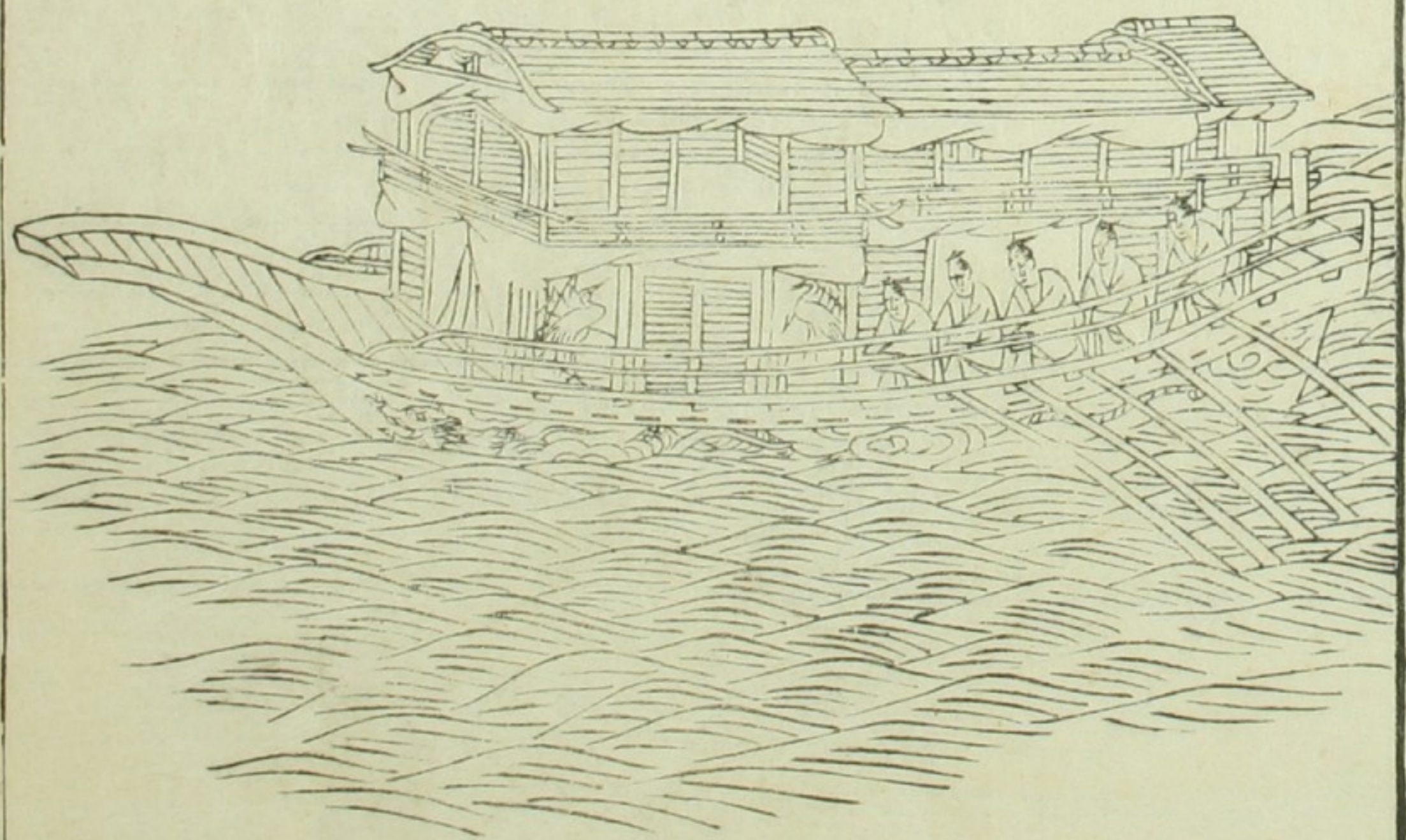
屈平章曰乘一注曰一船有窓牖者也又船舟淮南

子曰湯武聖王也而不能與越人乘船而浮於江湖

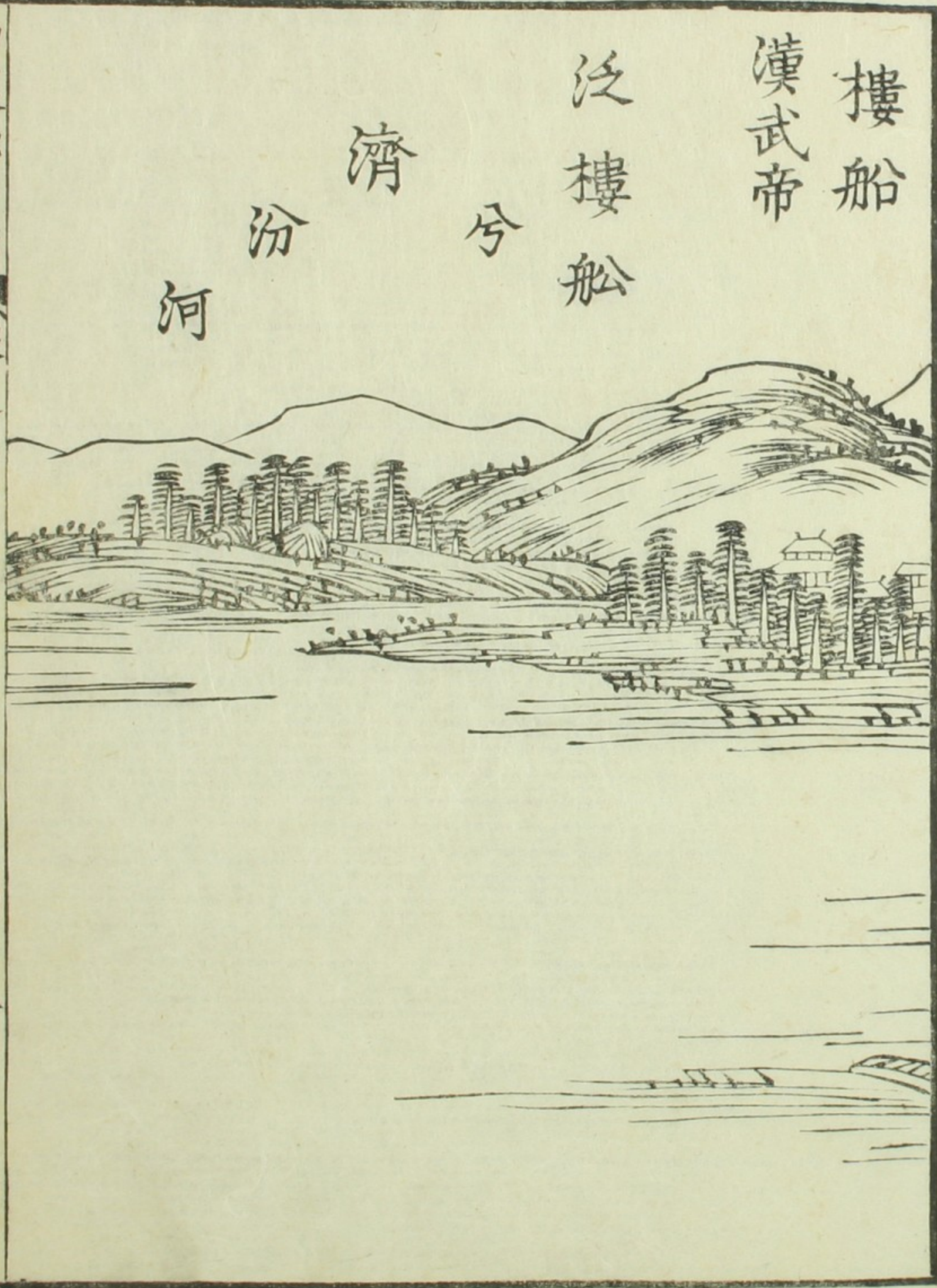
漢武帝秋風辭曰泛一兮濟汾河應劭漢書曰

注曰作大船上施樓故號曰一

樓船



和漢三才圖會卷之三



造るゝ三重或四層五層樓巧り又同名軍船の如し

飛雲舟

吳都賦曰飛雲蓋海制注曰皆彫鏤采畫有軒
橫華檻之般也江表傳曰孫權乘飛雲大船注

曰飛雲船上樓名甚高者蓋海言多也皆彫飾奢
麗其制度非常之模軌也

黃篋船

隋史曰煬帝幸江都五品以上給樓船九品
以上給一上編竹如簟以護風雨

餘艫

郭景純江賦曰連一一字景曰經典通用餘皇左
傳曰楚敗吳師獲其無舟餘皇

杜預曰餘皇舟也

紫宮舟

升進舟

曜陽舟

飛龍舟

射獵舟

以上五名晉宮閣記又曰天泉池の中より有

鳴鶴舟

指南舟

以上二名よまおし靈芝池の中よりあり

雲母舟

無極舟

以上二名よまおし舍利池の中よりあり

常安舟

上より一都亭池の中より

長安舟

東方朔曰武帝乘長安舟游洛水又江表

傳曰孫權于武昌新裝大船名為長安

太白船

蜀王本記曰秦為太白船萬艘欲以攻楚
注曰太白船名

太平舟

武王軍談曰王侯之後以の舟ありて
効さる様も造る者あり

太福船

茅子白高大如樓可容百人其底尖其上闊其
首昂而口張其尾高聳設樓三重於上以茅竹

堅立如垣其桅二道中四層とつる但帆順風順

回翔は便巧は帆をよつるは帆を假て接後
さし戚継光曰喫水一丈三尺惟利大洋

大福船

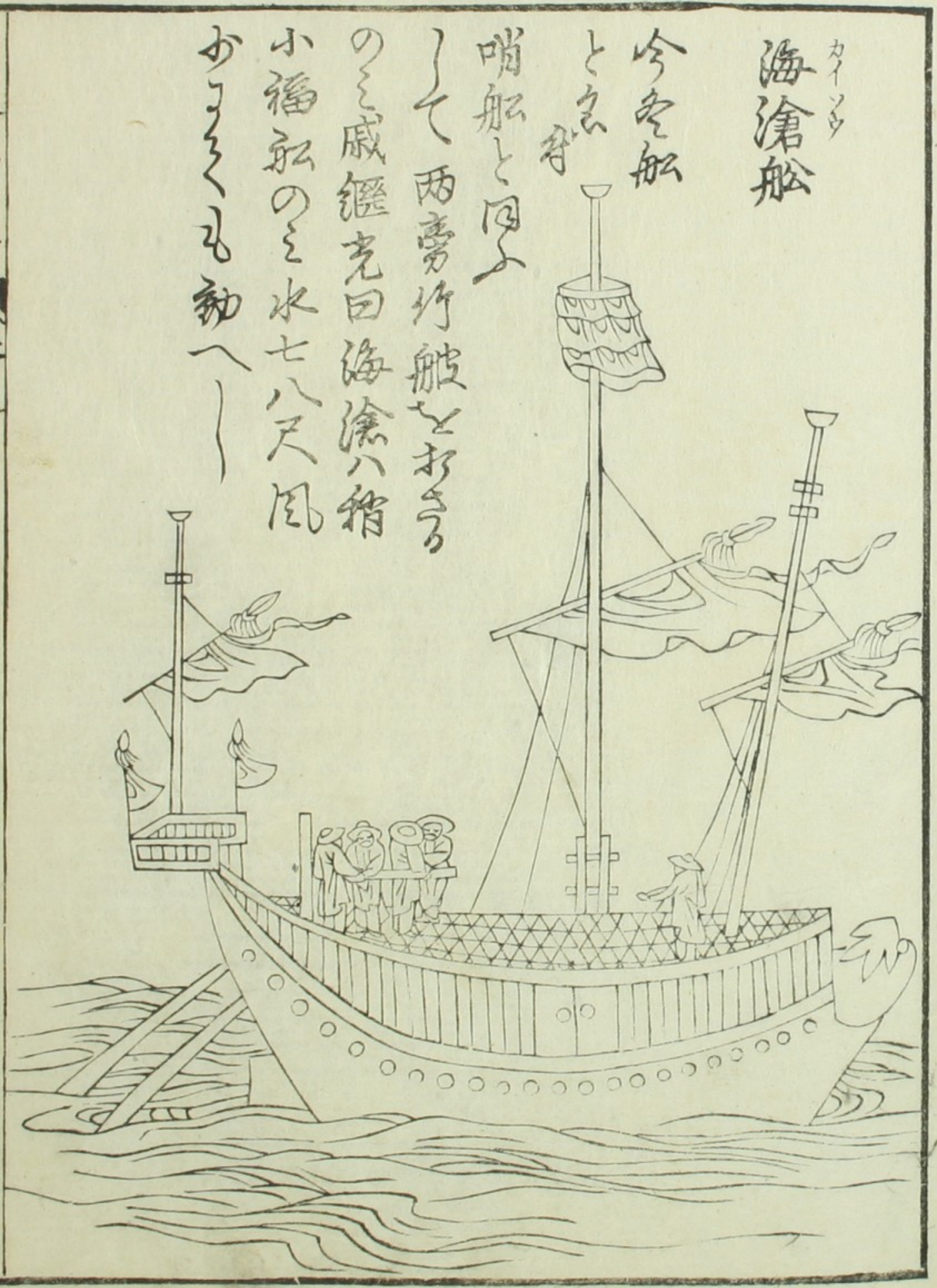


草撒船 草撒船即福船之小者



カインダ 海滄船

今を船
と名
哨船と曰ふ
一々 兩旁竹船を打さる
の威繼克曰海滄八指
小福船の之水七八尺風
かゝるも効へ



威繼光白
近比蒼山船
と改割て

鐘船と云ふ

蒼山又比すれバ

稍大子て海倉小

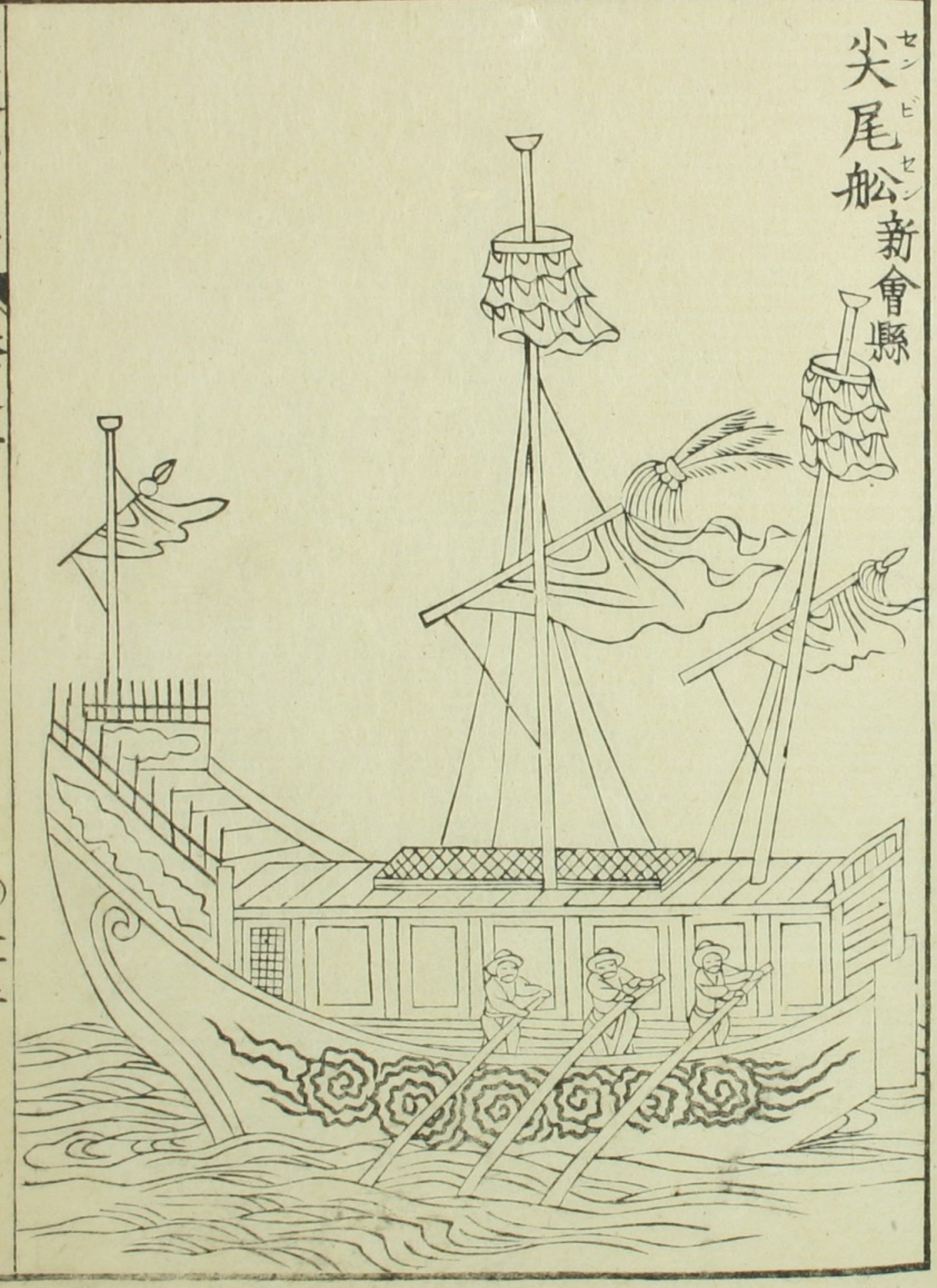
比まれば更り

小して立發

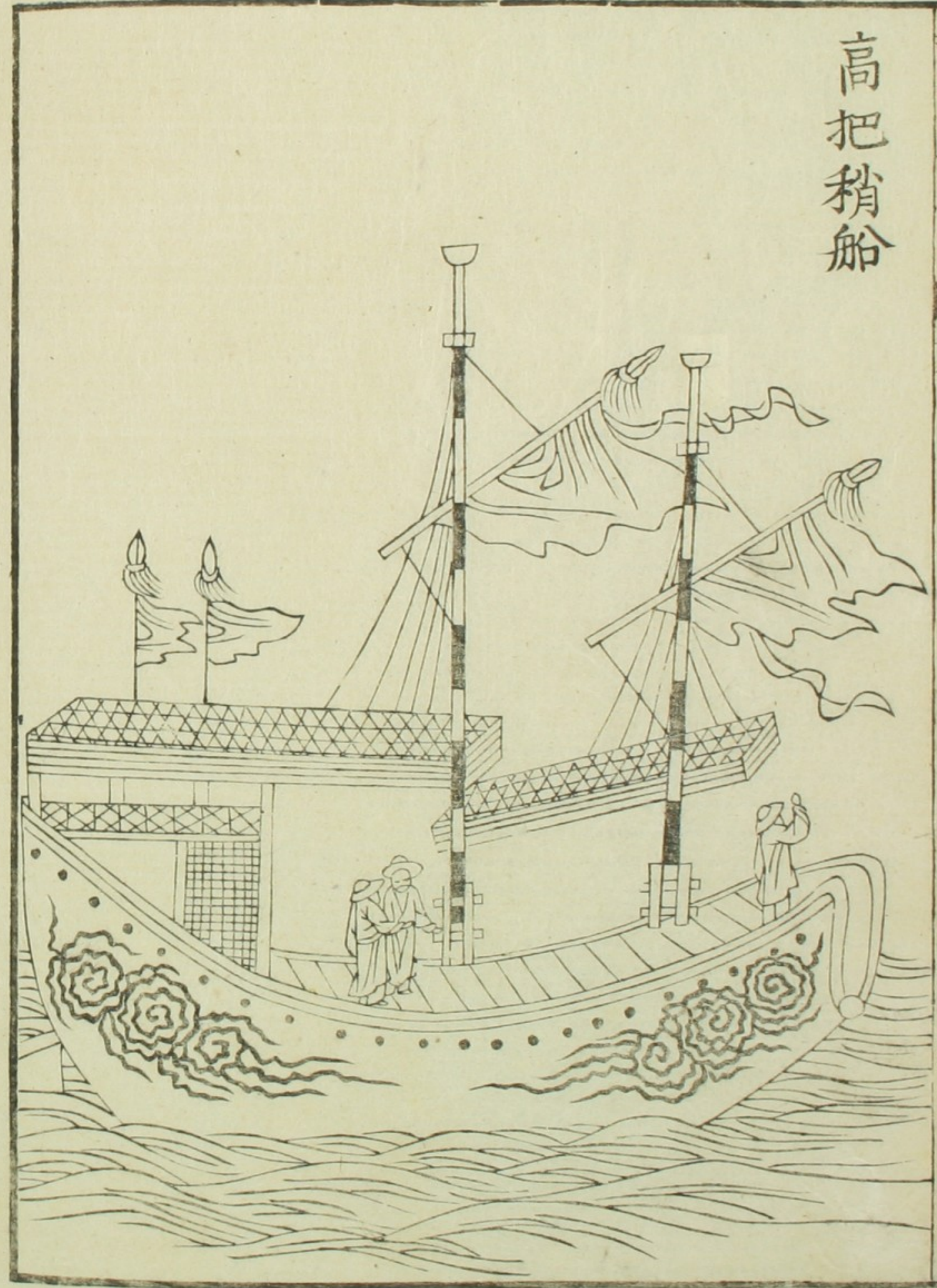
船 艦



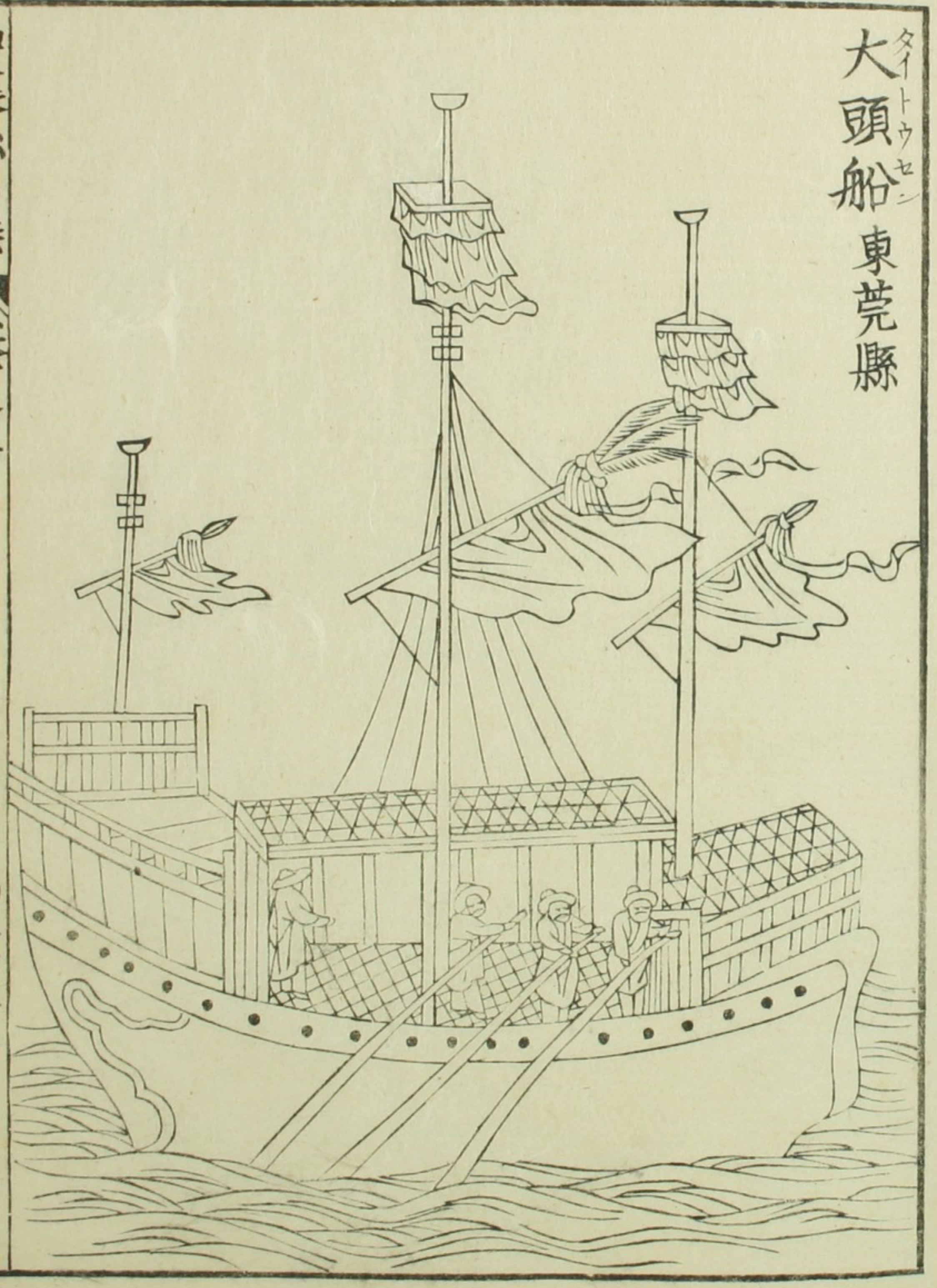
尖尾船 新會縣



高把稍船



大頭船 多トウセ 東莞縣



大頭船

三才圖會曰亦係廣船武備志云廣船今鳥

船之名付又橫江船巧云數号其白船と

糸と云者八則福建船の式なり茅元儀曰廣船八鐵

力本と云く造る福船ハ查枚の形すす及二船海より有て

相沖擊さる時ハ福船ハ即碎鐵刀の堅さあり及三日

本船を造る亦松枚の形を用あへく廣船と相沖せし

廣船ハ壞れ時ハ鐵力本の修理を司る制下官上寛江

状西翼のこゝと裏海より有て別徳なり亦洋に有て

初搖は是船の利弊也

温麻五會

風土記曰永寧縣出豫章材合五板以為大

船

因以五會為名也と云く

書畫船

宋史云宋帝書と云く及又と云くして画と

船

准間又發遣と云く牌を引船は扱て米家書畫

書畫船

晋の拓玄北と伐んと云くして他の處を

と

畫船

蜀王北は精してはと云く及又と云くして

鳳船

南部烟華深曰隋煬帝御龍舟簫如衆一錦

單船

三國志曰曹操東よりと云く及又と云くして

輕船

唐杜甫より治は供河怒濤過

金舸

唐史馮益高州の首領豪俠なり於て以て金一舸を裁はるるを以て云

弘舸

吳都賦曰一一連舸

大舸

杜詩富豪有錢駕一

一舸

錦繡段一舸玻璃凝不流

舸

字彙

走舸

武備志

撞雷舸

洞冥記曰昆雲池中有一

凌風舸

杜陽編隋の處士元藏幾と云者海中の一洲は

多の人の曰是別陰洲方り圓を去ること數百里洲方千里人多死を以て藏幾ゆんことを云ふ洲人凌風舸

と制して是をまづ水を激して其のくく旬日東萊

よまに

舸

和名數聚曰高尾舟一云戰士可乘之輕舟也漢

語抄曰波夜布衿舸快船並小同日本紀

早舟合類節用曰王者船之名

揚子方言南楚江湘凡船大者謂之舸本邦今俗て

開船と云或挺まより八拾挺まよりに多き皆又其

新子載

ふんく湊おちるふや舟れまらもはくぬ多きまら

ニヤタタテ 仕学大来
貳挺立 日一保中

備一隻櫓快船

以ちやうしらの名身

と後せり又舟の

中並て小き者

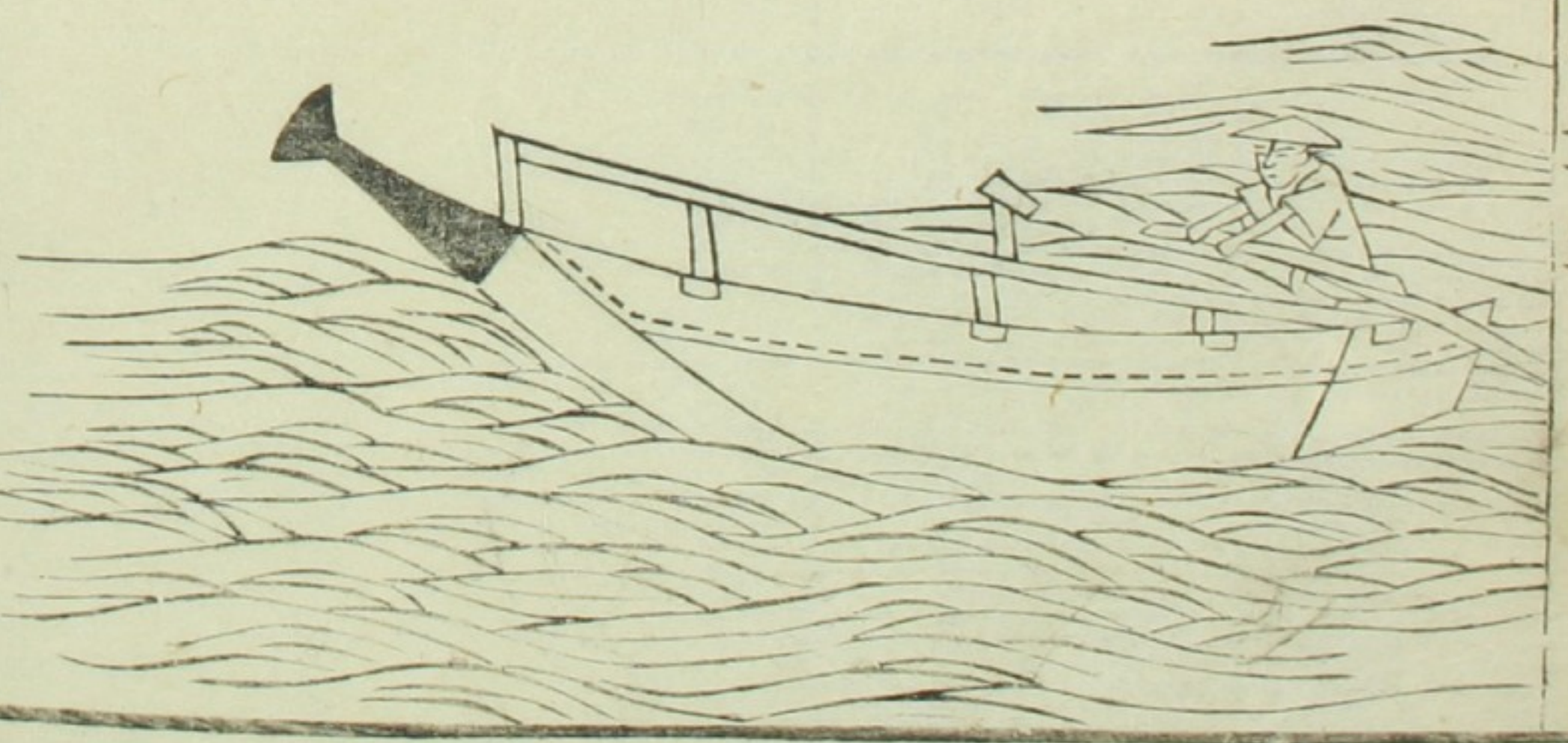
四挺立 同上各甲
中備一四

楫小船一隻

あちやうしらの名身

六挺立

八挺立 八重舟抄 藤屋 草子 くらとあり 八挺也 櫓 八丁 五丁



と云ふより今八丁小早と云者之 伊藤氏曰圖書編ハ八櫓哨

舩八丁立のそん舟と云ませり水滸傳ハ每船上四把櫓

八箇人揺船と云へしり是又四丁立と別を分るれども

志うるハあしし片くは四丁立と云ハ八人一七押は

ちをねそ八丁立ち方ぐべし一四把と云ハ又と云うとく

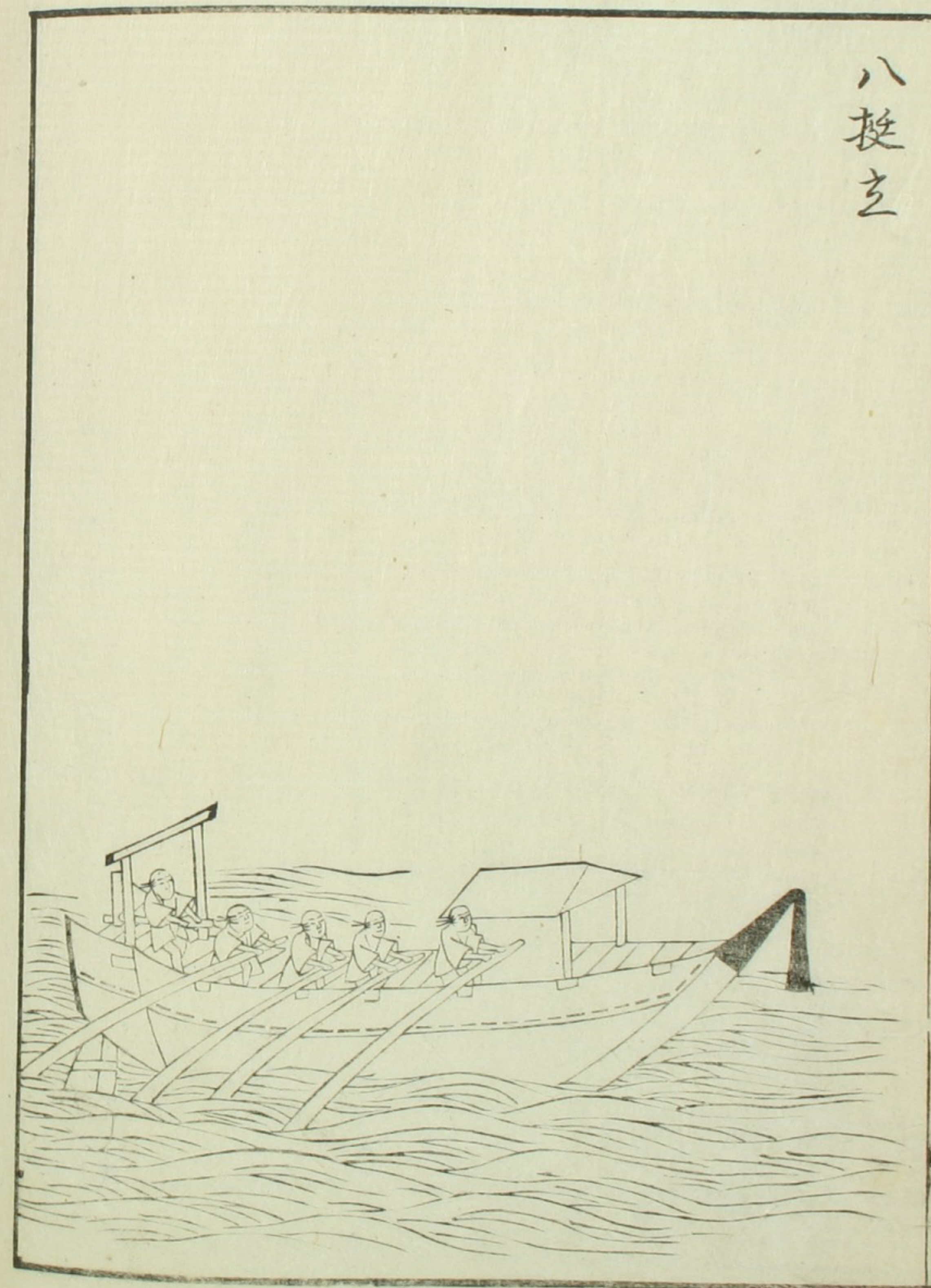
本邦の古法ハ二六挺曰六挺と云の類二四挺の舟と云

あしとく

夫木

やうちうけ清くれりまたりころとまりと云ハ神人すとも

八挺立



拾挺立 櫓を拾下き舟拾挺小子と云若き舟よみ舟中

よめり者なり

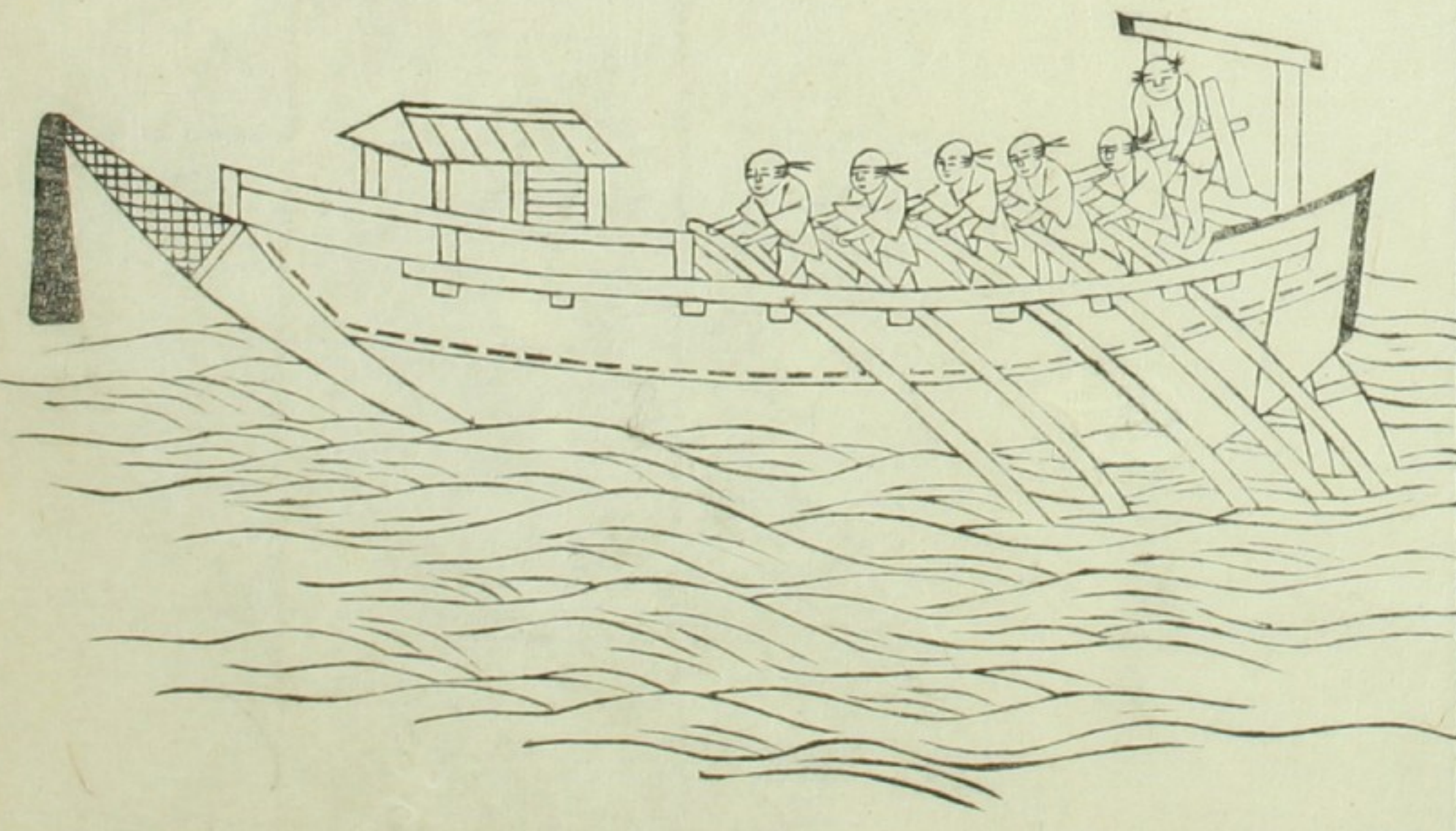
五手船

万葉経祇回系系は曰櫓拾挺さつり舟とみ舟
とさう櫓三つを一舟とくへるこ又舟八仔豆乃

因よりつり初らぬ候豆舟とも云と中なりと
又へり季吟曰み舟の流ハ奥候抄よりり候豆
舟の流ハ童蒙抄とさうりハ云法抄は万葉経豆より
ゆり舟とも云奥候抄は曰船くもれをいりてと云
あり片方は一人は合せく二人と一舟と云とみ舟
船十人しとく船也和漢抄は曰いつく舟ハ地ハ
と所流字の何れなりとさうり是いりれぬとさうり

十人してあくるひるにわたる中と社中抄藤垣まよも
 又くつり又伊豆の船の尻ハ伊豆の國より他り和りとも
 ハ多岐味之者蒙抄藤神て皇の祐世舟を引くつり船
 舟ハ大船あり又舟の船よりつり又舟の始ともよも
 何れにそに神代は天の舟船徳理法舟船より可成に伊
 豆舟丈船とくひる六別万葉船名よしてあまうち伊豆乃
 字義よりつりつりまもつり又の和語伊豆の船より伊豆此舟
 揚る船と造じぬ船ともよふり國名よと云船して世説をつりつり
 誤ぬへ一又舟船法補の真似船の尻と澄とよへ一揚十
 挺立る舟よして今十挺立小舟とも云者あり
 万葉 是れ舟此海にときつり舟船ともよふまもつり意はまけせん

五手船



夫木
 又舟船
 順徳院

追風をきく
 ぬねし

三平のうらな
 ようら
 ちうら

和漢船名考 卷之三

コハヤ 小早舟也今舟の字略して呼ぶは足子の小舟

とよめりゆはちり楊氏方云は曰小舟謂之艇

浪は云今に東は艇を呼て小艇と云也又船艇と云

と云くつり小艇と云くは其船の底小をんて云おる也

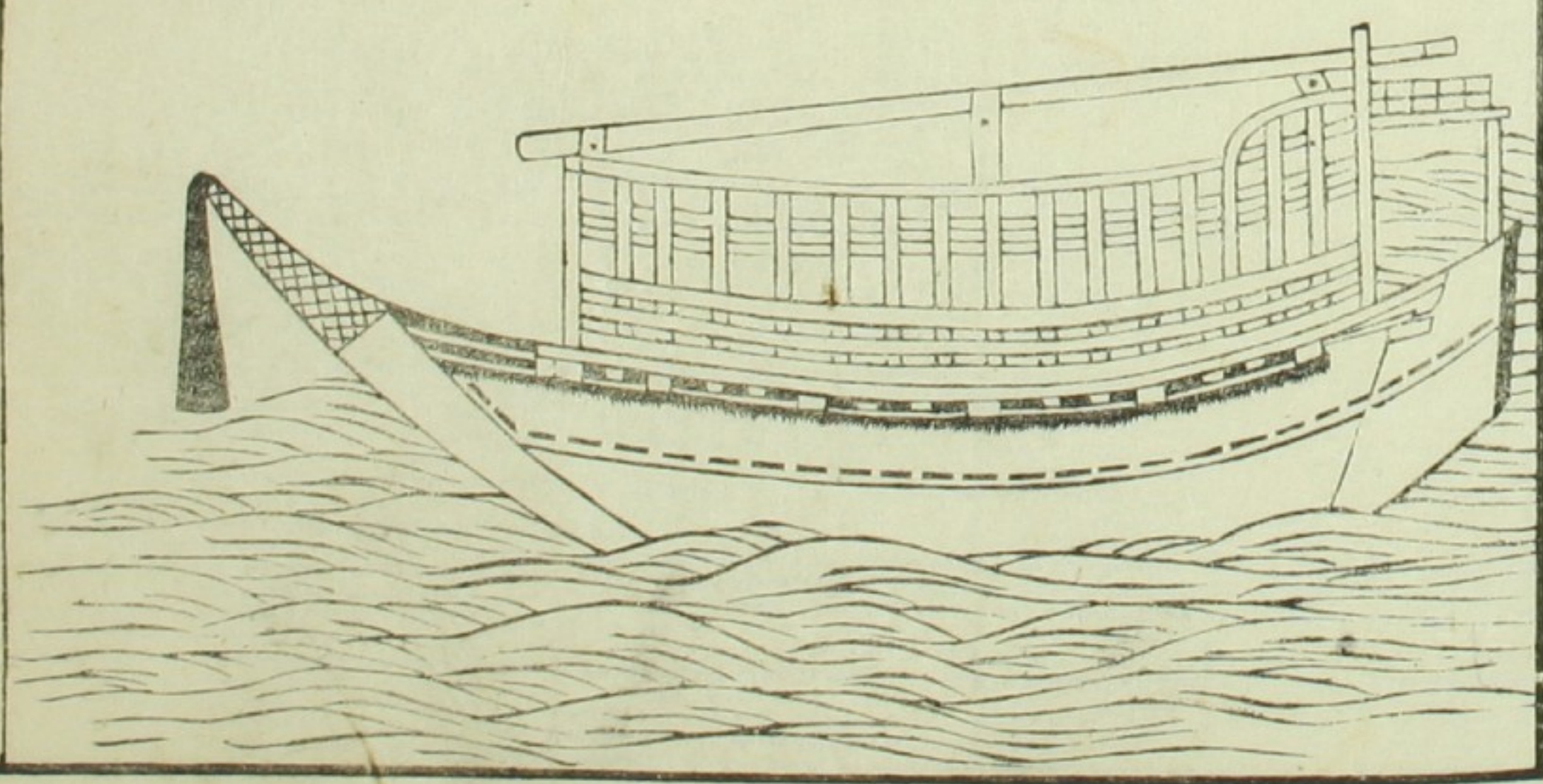
船艇ハ字彙は釣艇と云又船の底と云くつり船艇

或ハ艇の字艇は何と云は 本邦曰接挺立下

と小舟と云云あるなり

万葉 船はと云は此舟舟のり年と云は船と云はと云ふ

小早



和漢船名考 卷之三

拾貳挺立 或ハ二六挺云 拾四挺立 是より以下

拾六挺立 拾八挺立

貳拾挺立 貳拾貳挺立

二拾四挺立 二拾六挺立

二拾八挺立 三拾挺立

三拾二挺立 三拾四挺立

三拾六挺立 三拾八挺立

四拾挺立 或挺立より 二十名 ヤク 余 好 き 者 是 と

小 又 と の う ち の 中 に 在 り 之 或 ハ 欄 干 造 る 外 救 急

關船

舟 方 云 又 曰 關 ハ 城 塞 門 也 又 要 舍 の 名 也 け た
又 名 付 又 曰 十 挺 立 以 下 矢 余 方 者 是 と 小 子 と

云曰十挺立は矢余行り者是と云関船と稱す

と凡百有餘年のことにして古ハ名尻船と云也

次は尾言記に於たりと云はるるもよく讀て

古今乃通名なり関船の名は法の中を又ハ舟法要略に

載りたりと云ふ是を又ハ如前より継承する火燧といふ

のよせと云ふの名をせり今関と云て通名なり

四拾二挺立 四拾四挺立

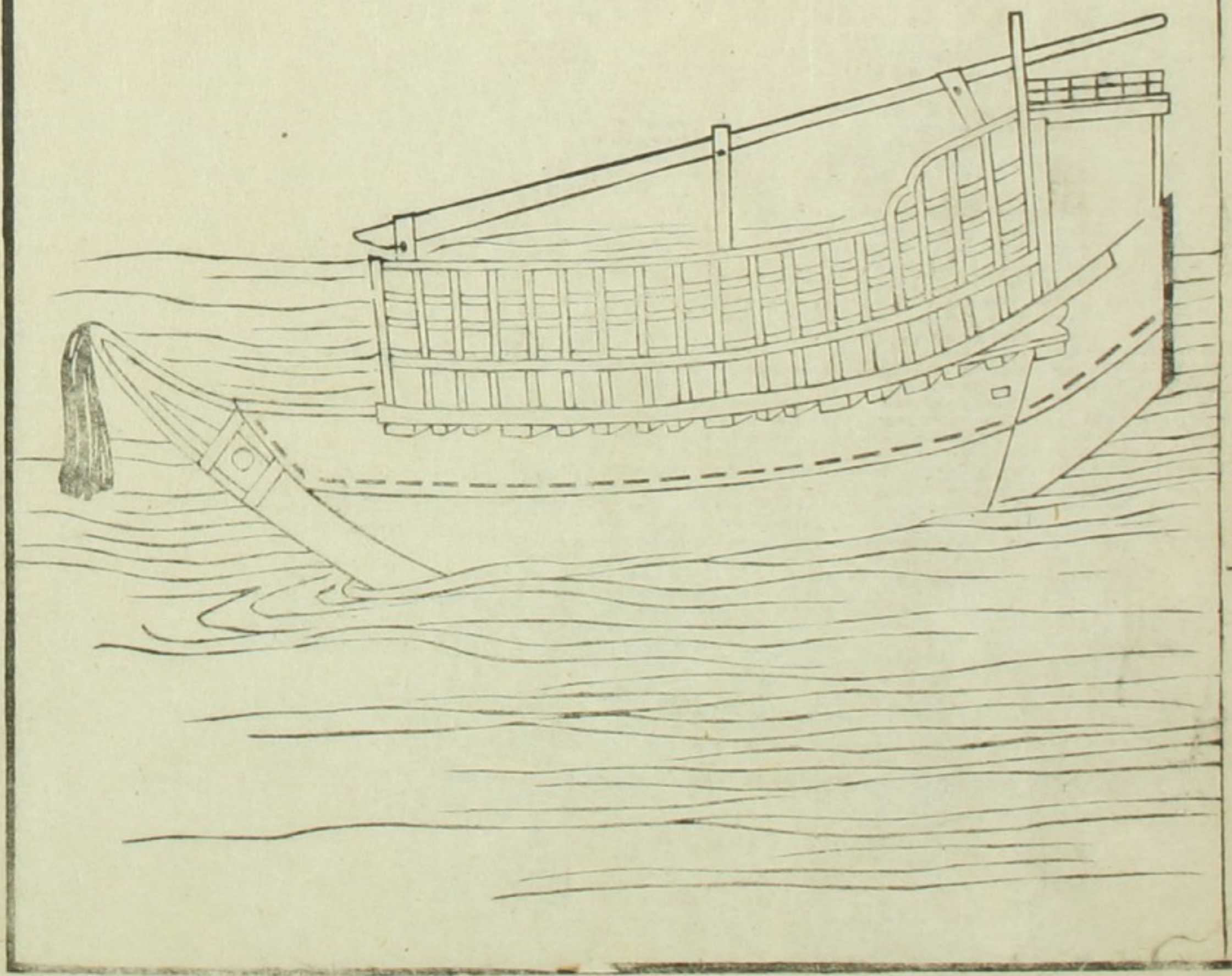
四拾六挺立 四拾八挺立

五拾挺立 祖 練 先 生 鈴 源 課 造 大 船 中 船 小 船 の 名

是之船法規矩又曰十挺と申すは定規といふより

上下大船小船ハ規矩の外増減の法有りはる

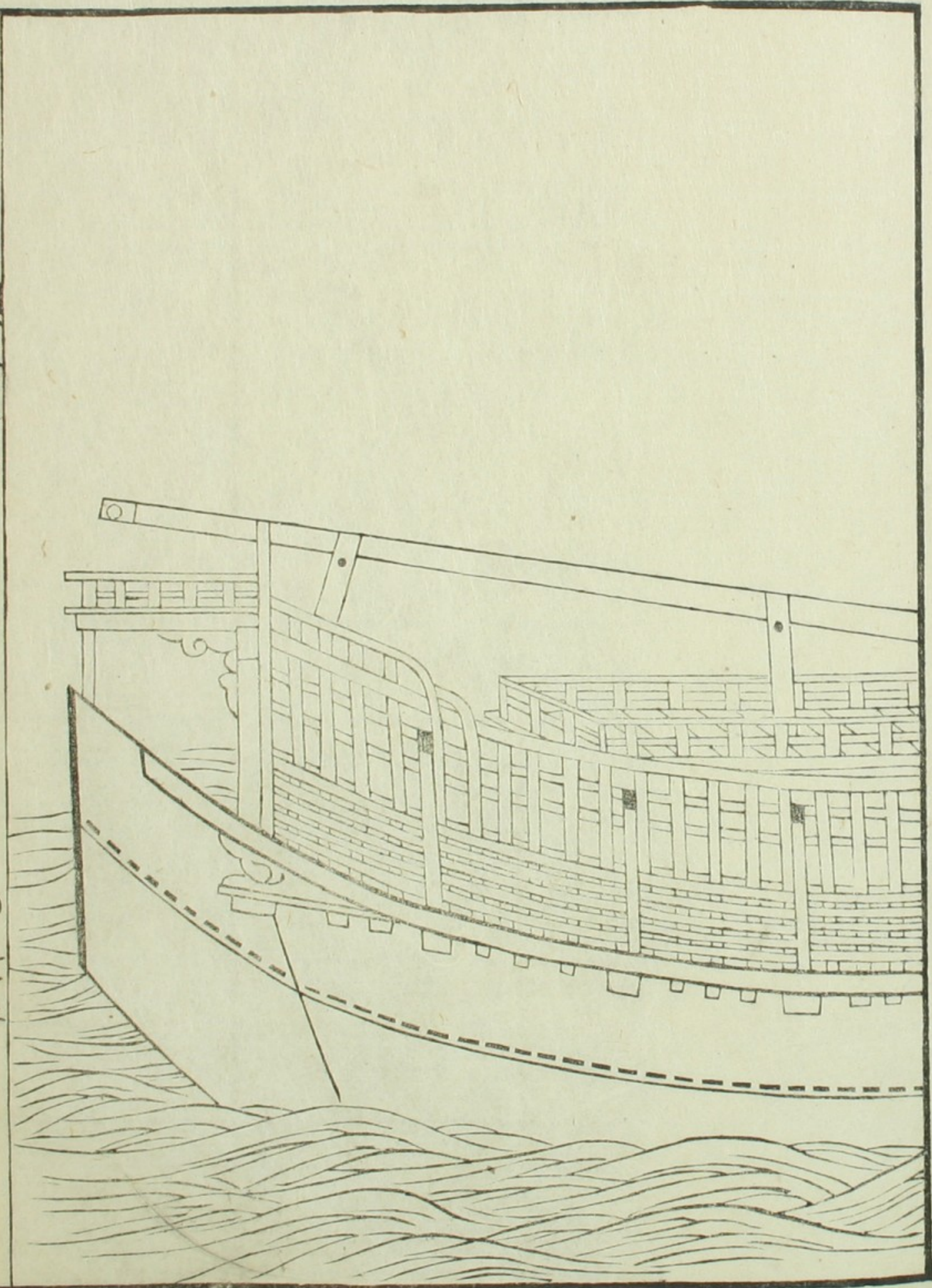
六十挺立



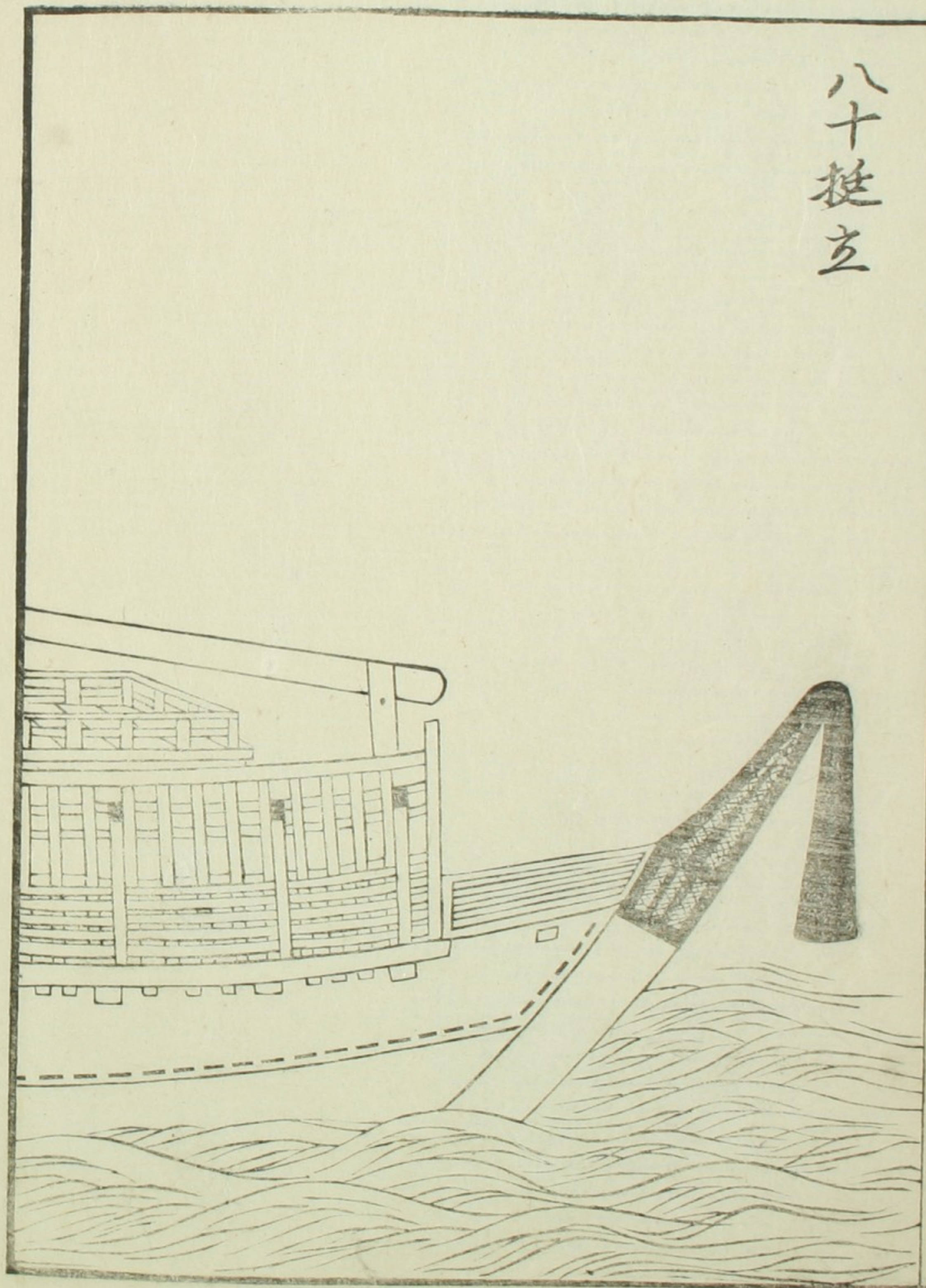
五拾二挺立	五拾四挺立
五拾六挺立	五拾八挺立
六拾挺立	六拾二挺立
六拾四挺立	六拾六挺立
六拾八挺立	七拾挺立
七拾二挺立	七拾四挺立
七拾六挺立	七拾八挺立
八拾挺立	

梁^{ヒヤウ}の王僧^{ワウモン}辨^{ヘン}傳^{テン}は鵠^{カク}船^{セン}其中載^{ノス}戦士^{セリヤウシ}あまは八十
 棹^{トウ}棹^{トウ}と皆^{トウ}越^{エツ}人^{ニン}といふ

和漢公相集
卷之三



八十挺立



和漢公相集
卷之三

本邦國船と稱する者曰後二挺立のこころより万葉
 八十梳のけとよめり者と季吟の終よ八十梳ハヤク
 の櫓也八十梳掛八十梳也ハおほくのこころをつらぬたり
 と注せり櫓櫓ハ棹皆同くハ季ハハ用具の
 船櫓の下ハあるハ今櫓床を貴と云掛る床をけり
 と云古々の船うらハ櫓を八十挺立と云あり
 万葉 八十梳をまかかれハわきとこころまれと云ん社ハハ
 曰 強波津まみりおろすハ八十梳ぬき今ハ櫓ぬともハ若こり
 二人漕 國船の大船也二人漕何指挺立と云ハ拾挺立と
 ちる者櫓一挺ハ水ハ二人うら至て押さる二人
 掛りとも云二人漕のみ十挺立ハ櫓を押し麻子の

人救百人よおよつり船の造り極も遠行りて増減
 の短矩何れハ此なり

御召御座船

御召替舟

引舟

漕船 則引舟之先ハ船めく流石の舟と引者

漕船 漕船 並ハ同也船と云ハ漕之

臺所船 又厨船と書
 川舟の船よ出

納戸舟

小荷駄船 又行李船曰川舟の船よ出

馬舟 水船

又水取船と云水傳同と云或 表船なり
 よしき異形は造りたり海上の船より
 のむこと何れに世中人の船中より櫃と看水を取
 く之様の舟也祖孫先生の曰船中よりハ陸へたり
 舟ととり或ハ海中に淡水の涌いつる知りしれと汲
 たりいつとよふ自中なる取水をやさく使しむへり
 るれと云くより又船より汲たり法を云ふなり
 海中に淡水の涌くこと云ハ舟の沖の沖川とよめたり
 へしこの舟ハ舟より水を汲る者なり
 大に船船船
 舟船集

水船

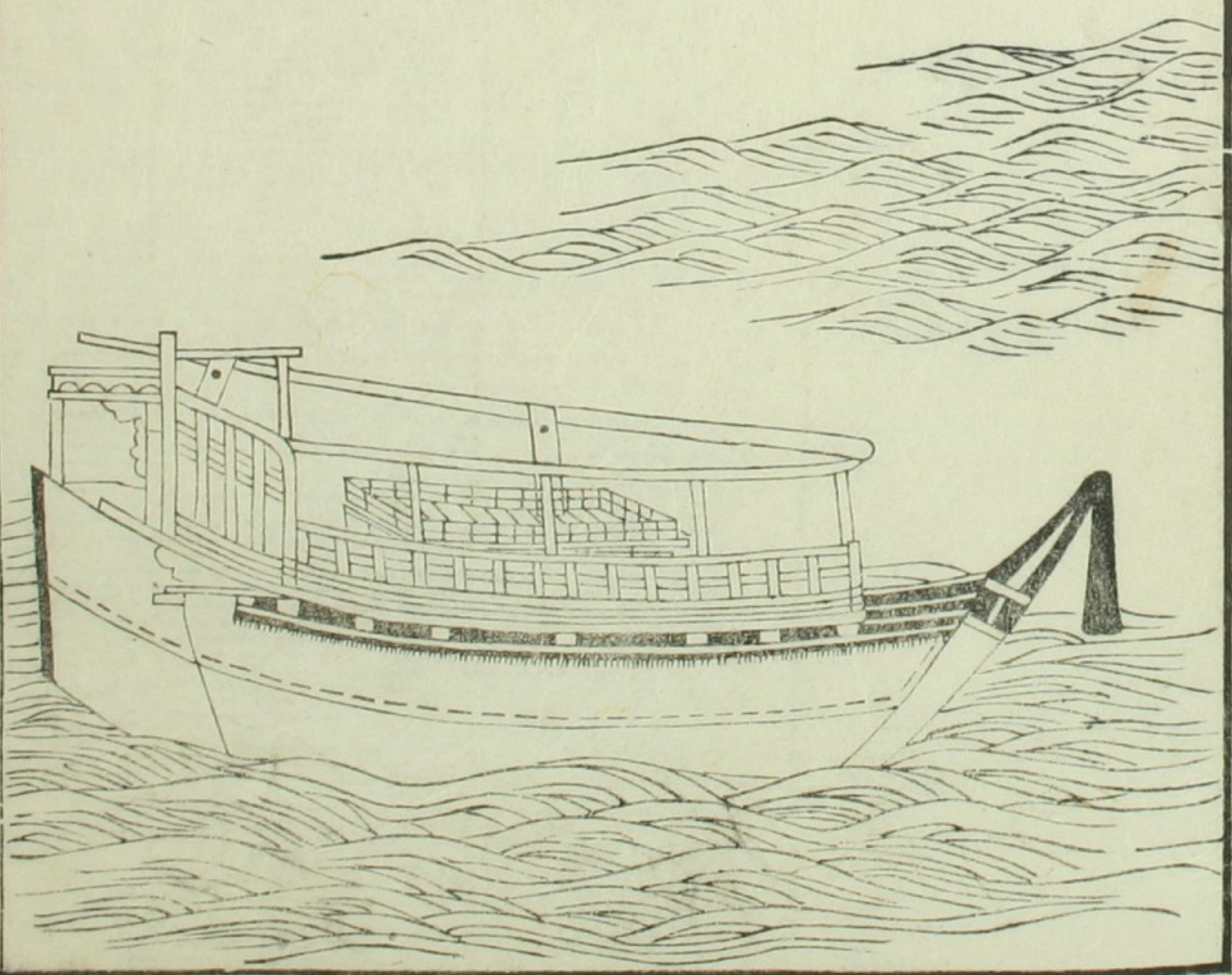


巡船

武備志曰衛所巡司所用者謂之巡船と云く
 一り万葉才三石上大夫の云よ極廻為鴨とありを
 あらりすりもと後くはは船と云い一り是ハ巧さり
 と云羽母て船と云ハ船なりしを蒙抄よりめく
 一りもと後く國司の王命を承んて舟泊を巡らす
 と云をと云く一りははのこくちをへ一上の白大船
 一りもと後くはは船と云ハ船なりしを蒙抄よりめく
 一りもと後く國司の王命を承んて舟泊を巡らす
 と云をと云く一りははのこくちをへ一上の白大船
 一りもと後くはは船と云ハ船なりしを蒙抄よりめく
 一りもと後く國司の王命を承んて舟泊を巡らす
 と云をと云く一りははのこくちをへ一上の白大船

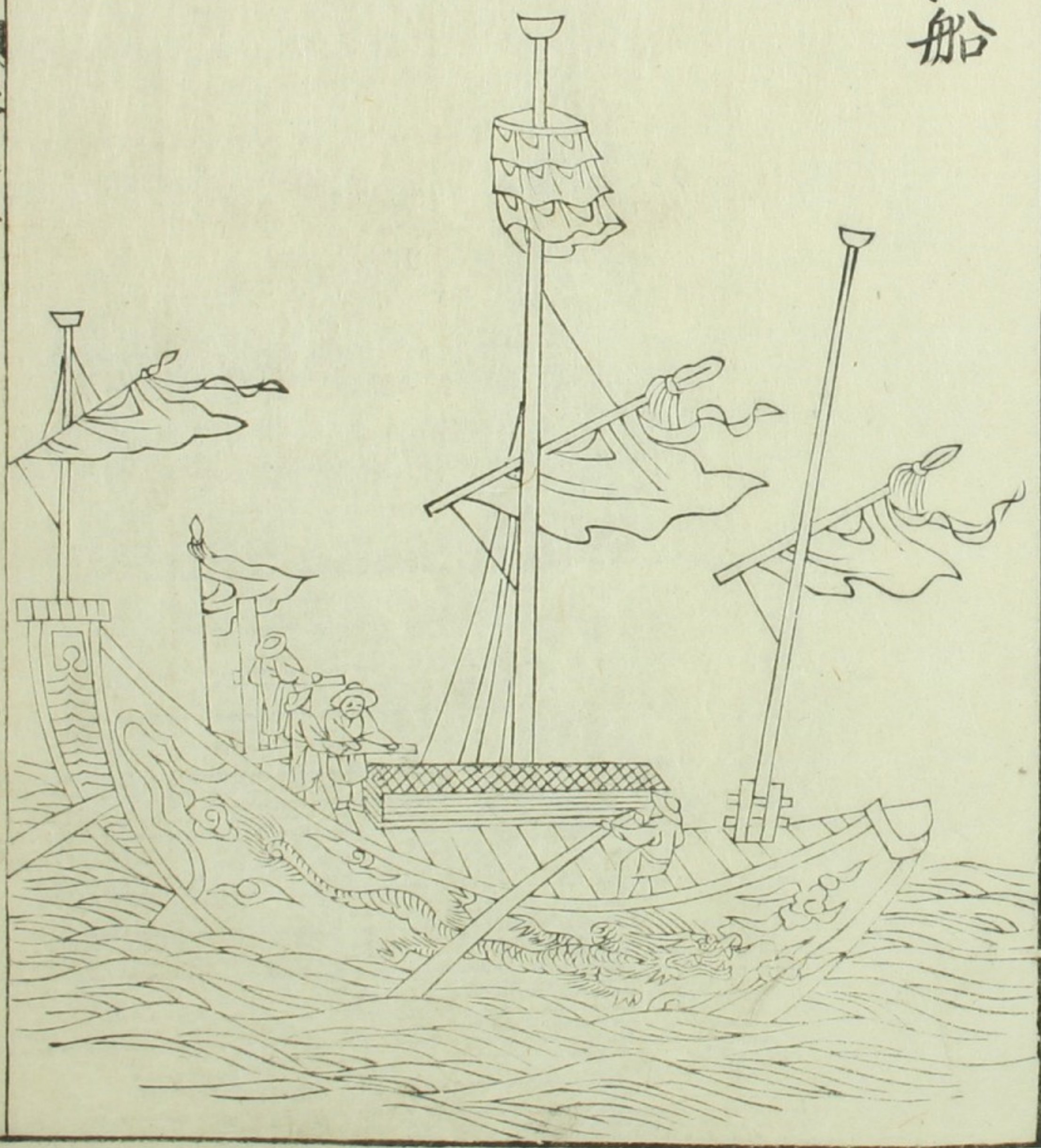
半垣作

小玉也
 半垣立
 寸法中ふよ
 さる板のなご
 屋敷帆柳日屋
 木あり



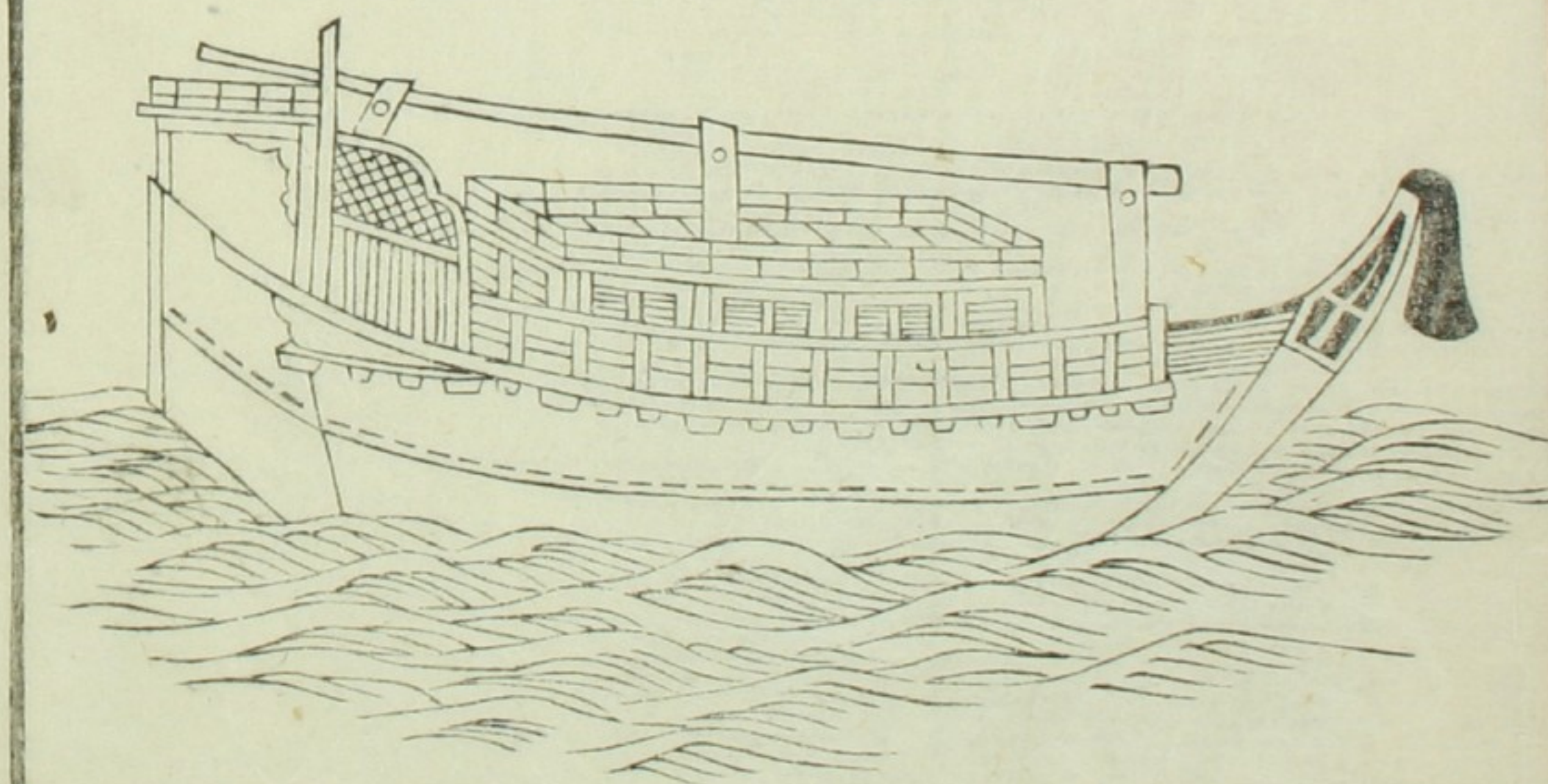
和漢公明集 卷之三

用浪船



欄干造

ラニカンツリ 垣立と
欄干造り
吉也



和漢公明集 卷之三

開浪船

威繼光曰開浪ハ其船考るとん故よ名付喫水
三四尺四漿一棹カチトフ

内ふ三又十人を容へ一風船吹送マタキタシマキタよろろりする是
荏滑ぬり白世舟ソコハ廣船の式と舟上福船の面フモテ

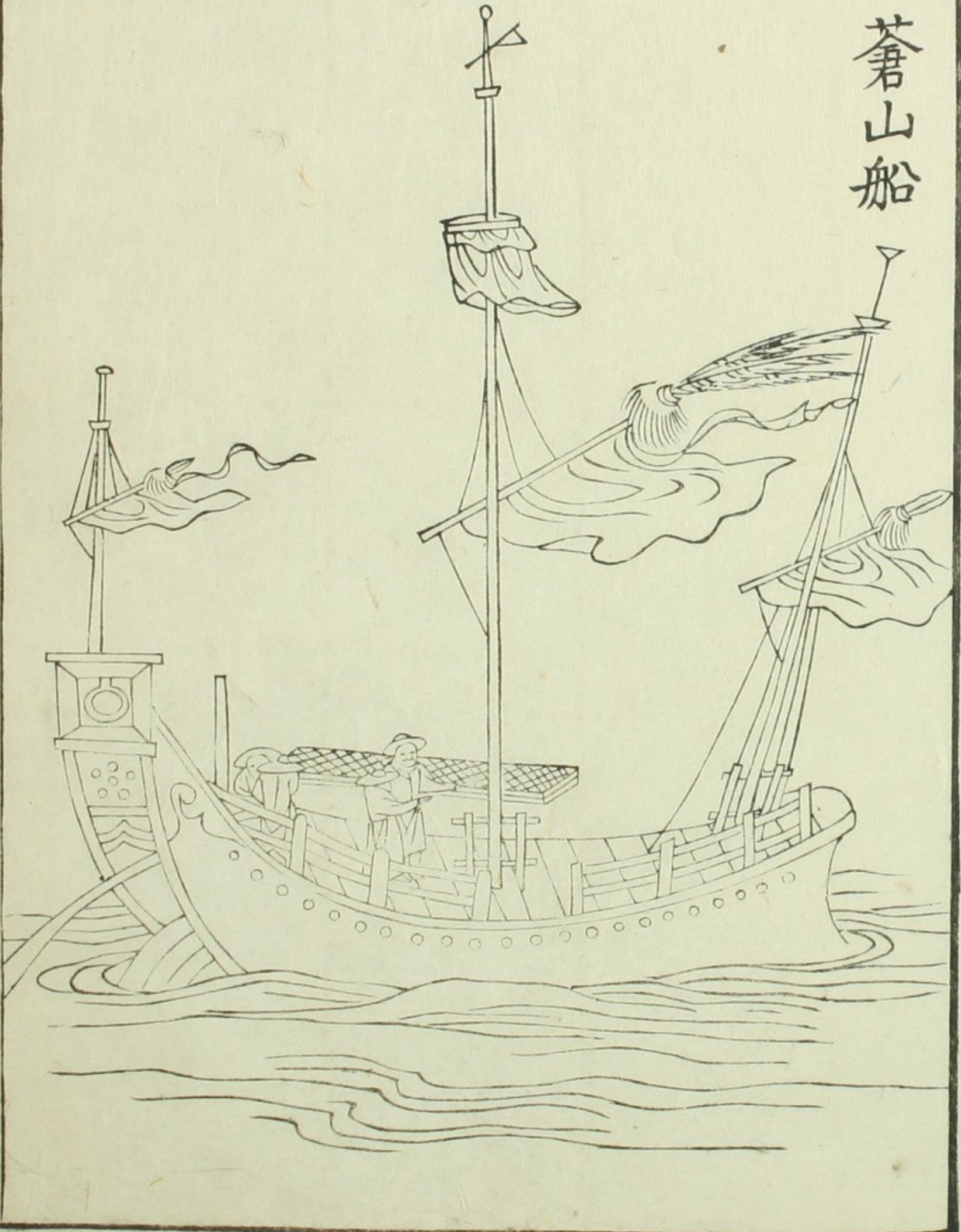
有りちるんとくんとり

蒼山船

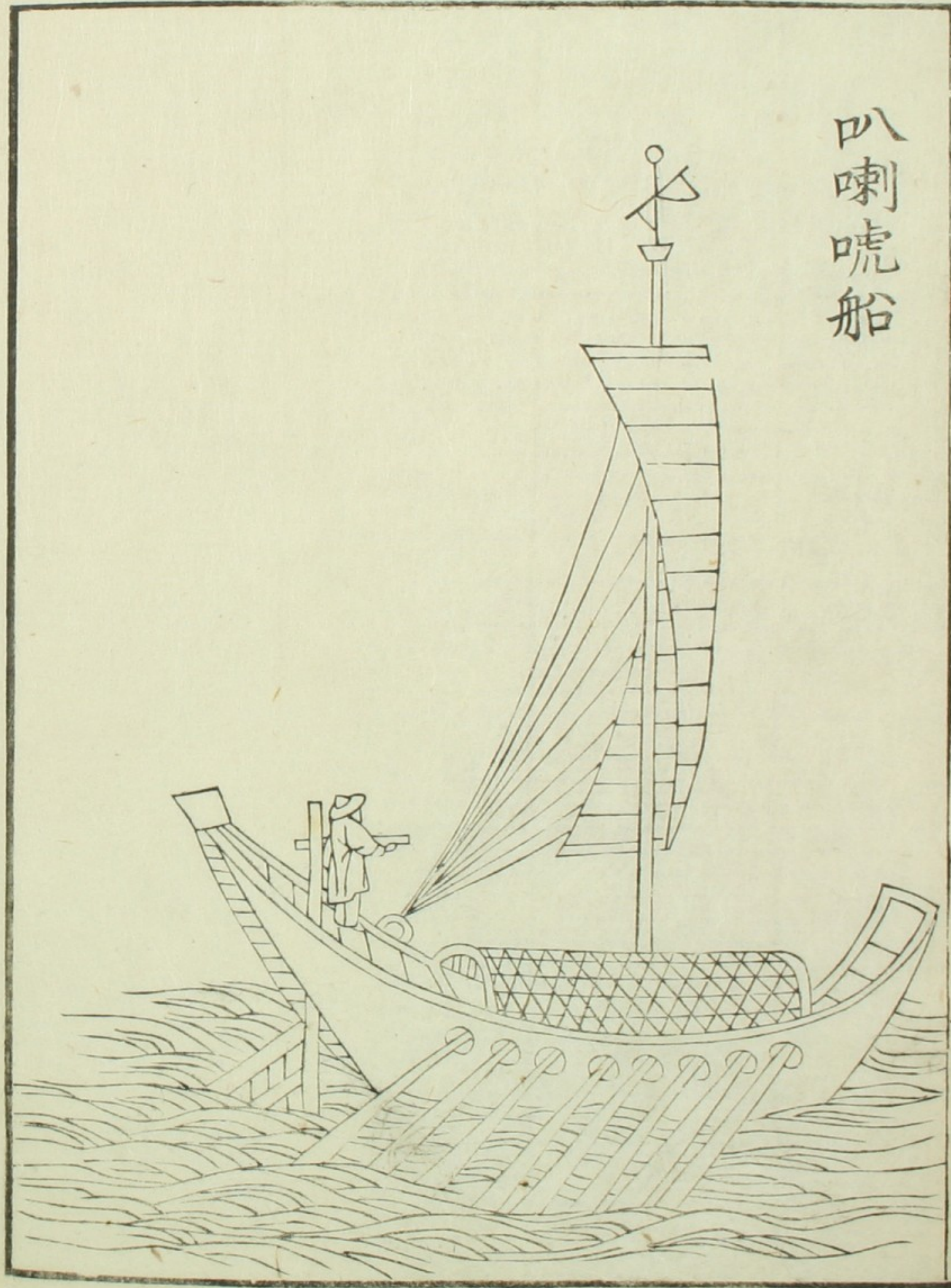
茅元儀曰蒼山船ハ其も以ひろく帆棹ホカ氣
羽風順ちる時揚帆アケ風ちる時ハ棹と望ツ其棹

ハ船の両方リマタ係ちるを以イコ後モ又イハ毎ゴ旁レ又コト枝シ枝コト毎ト
二跳ニナ跳ナ毎ト又二人といふる是也邦の扱挺シ立シて
二人かゝる也

蒼山船



叭喇唬船



叭喇唬船

式備志は曰浙直と云ありり仍り出は福建の
 烽火門より其制あり應突面洞首尾一様
 應龍骨を用洞は一丈長又船面は旁各板一條を
 用棹支是坐して後又同棹は各板一條を
 用或ハ八枚を疾くとも一風行は八枚を堅本
 帆を用

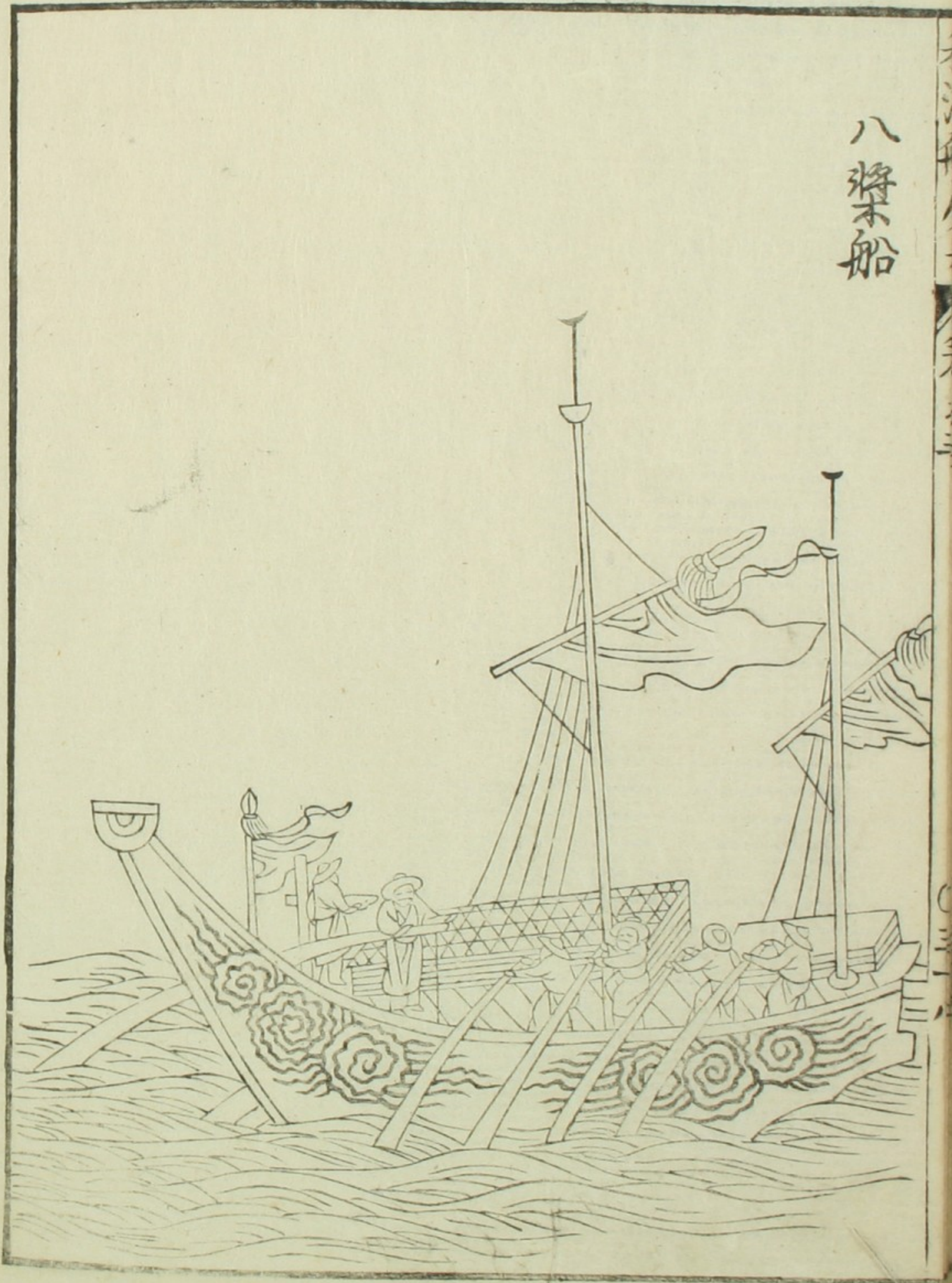
十槳船

圖書編は出十槳のともやふひと後り

八槳船

式備志は曰閩廣浙直と云ふは是を司と云ふ
 一り叭喇唬十槳八槳ともは子船とす
 本邦のよふ舟ハ槳將末の遠くハ舟權舟也

八将船



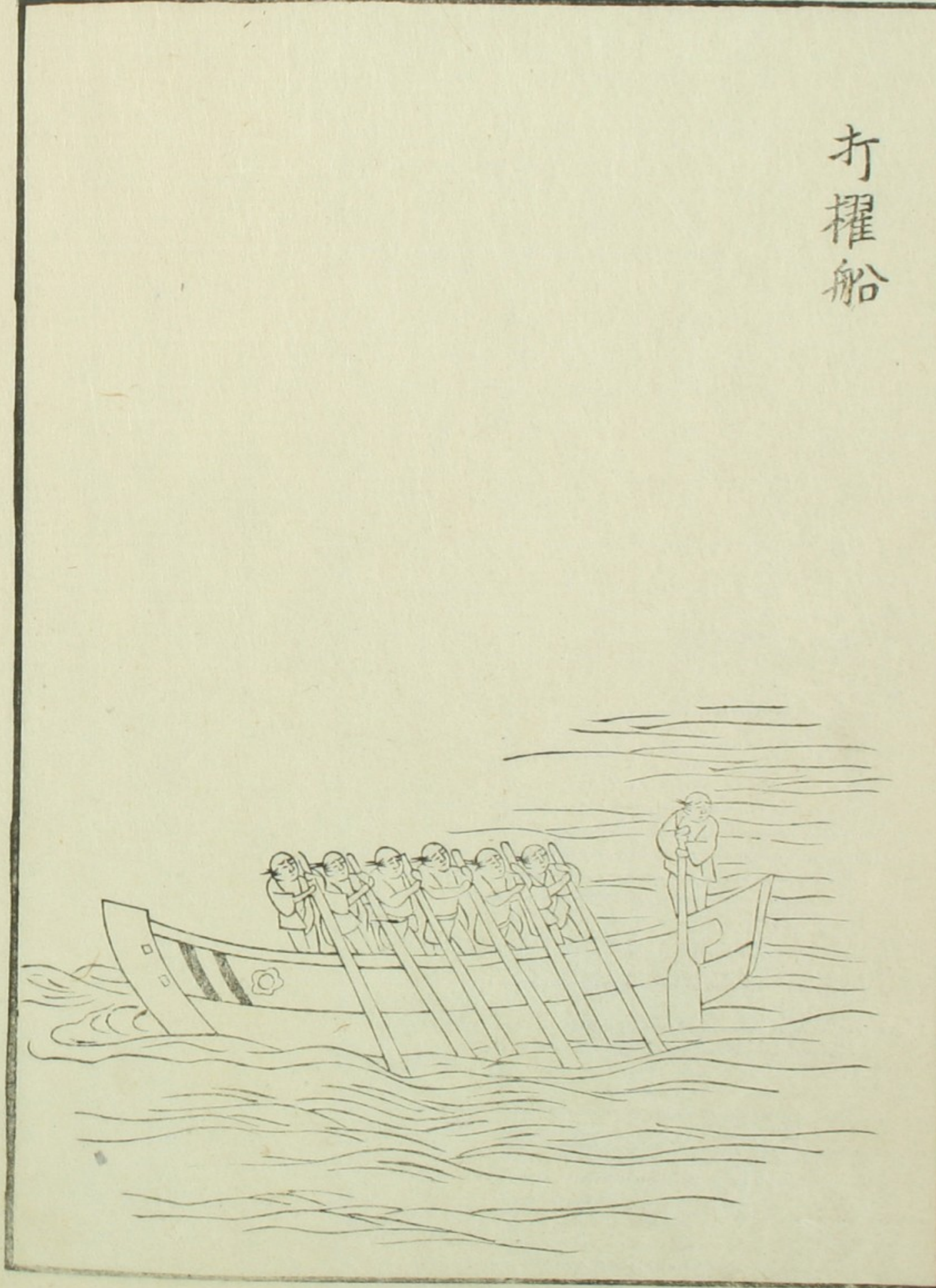
舟擢船

傳回船ハ皆舟擢を用船と將末と舟の長サハ九
 尺長余燦六丁八挺拾挺或ハ拾二挺拾六挺を
 船の大小より舟擢を多き者より後より舟を擢て舟
 を引る者舟を引らひと舟を引るを練擢と云ふ大舟にて是
 舟擢を引る者ハ一ハ喇唬十将八将より舟擢を引る者
 廻船綿着を引る者ハ出船の時第一二を引る者ハ舟
 の傳るより後者より又回舟より舟擢を引る者一人立
 采を引て引け来ぬ水を引きよめておくぬ舟の舟
 擢を引る者ハ舟を引る者ハ舟擢を引る者ハ舟擢を引る者
 是を舟擢舟と云ふ

舟擢船

舟擢船

打擢船



投船 ユタフネ

供舟也又小船を云大船を舟船と云ハ和漢とも
同ノ舟船ヲ舟の投船也

車船 クルマフネ

八雲御抄藤原朝もゆりちるは車と舟を
舟とやる者遊海舟河舟とも云河舟又車を
舟とる者色はまきり有りよりきり又舟の別院と
引く陸地ともやる自由方るるる車と舟と者
舟の御難難の場大河舟り八舟より三月まき河
をふさく舟と云舟は車船と云舟と舟と舟と
舟は車船と云へ又軍舟は同名也

名知小後
車船和国のことたをうめり舟窓をけて埒やりん
款云めりきぬこのは舟は車船と云き旅の日船と云り

千里船

郡邪代醉日祖中之以諸葛亮有木牛流
馬乃作一器風水よく以機を施して自
運人力を勞せしめて千里船を新亭江に造る是を
試よ日よ仍しと百餘里とるべし

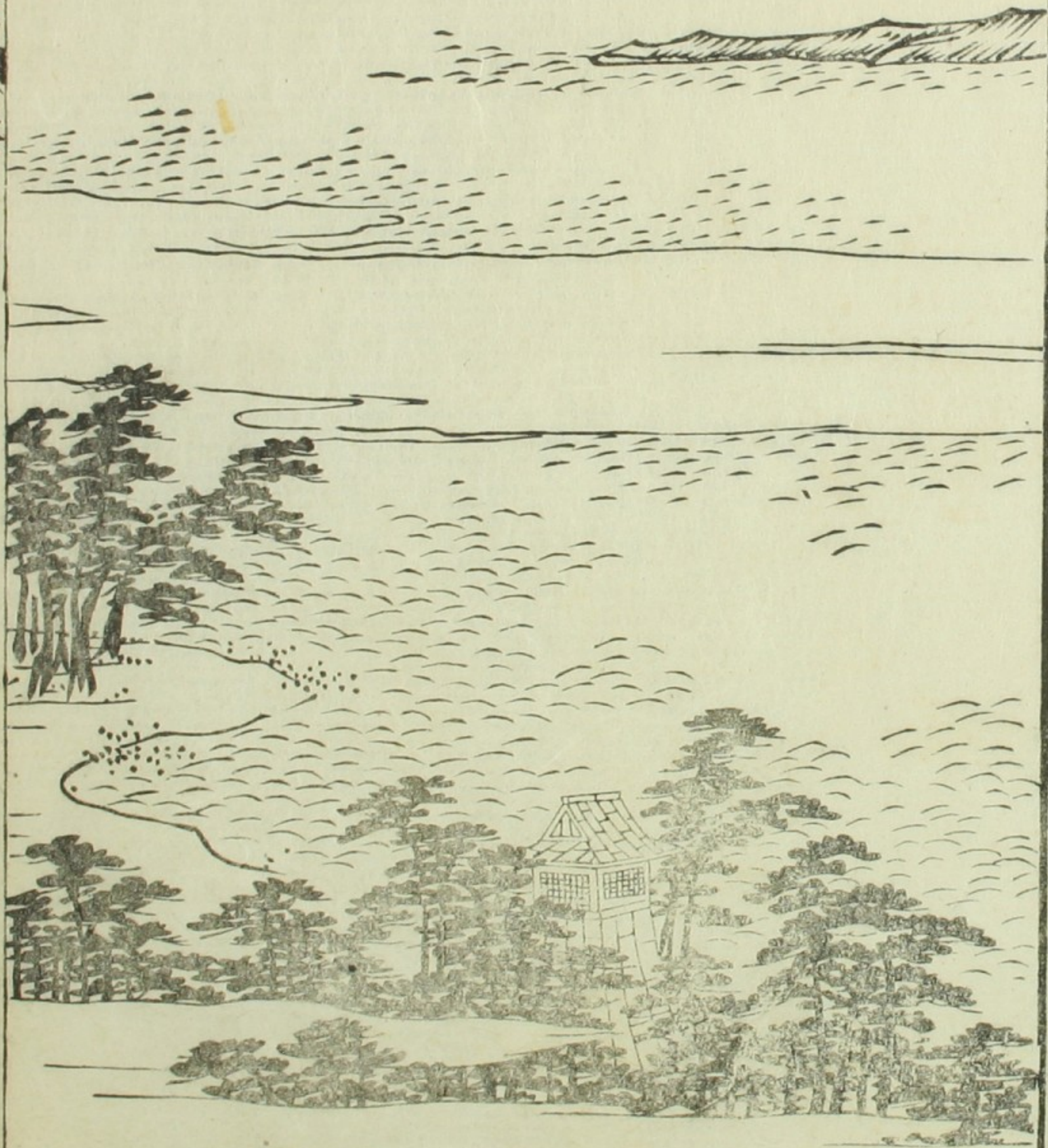
早鳥船

續云昔良財等よりりまの風ち純又曰耶波言
津文天皇はつら明ふの致是より約手の所井つり井
上は楠木を長百丈切く舟に作りてなるを船是の
なやきより多れ花くむし一旦明ふの後より發して
半時を以て往るの速なりゆかりを迅しと一擧として
七浪を去越ぬる時人又考とふ付あよ
風を死
徑のえのたうむきてとへらそ又考といつとよやう

や多絲八雲舟抄は屋あひとつり是ハ字義はかくるゝ
ちるへ一屋船と云ハ理處を云なり吳竹集は夫舟と
舟をやふひとほせり百紫八船と事又安治は日やあひ
たきハおほくの舟をひくありとつり社中抄ハハ陰抄
のおくり也たきハ檣の字とつり也百紫ハも今
引舟漕船と云の致よきと也大船をほくの舟舟にて
引をうへ

万葉
おほ舟とつるも小漕ハ八船も我んころふぬと云ふも
おほ舟
藤堀某舟の短よせりもおほり小又舟もく小
檣舟也と云て大船ハ二人漕と云て強を推
よ水と二人かして押はたりちも大よして船乃

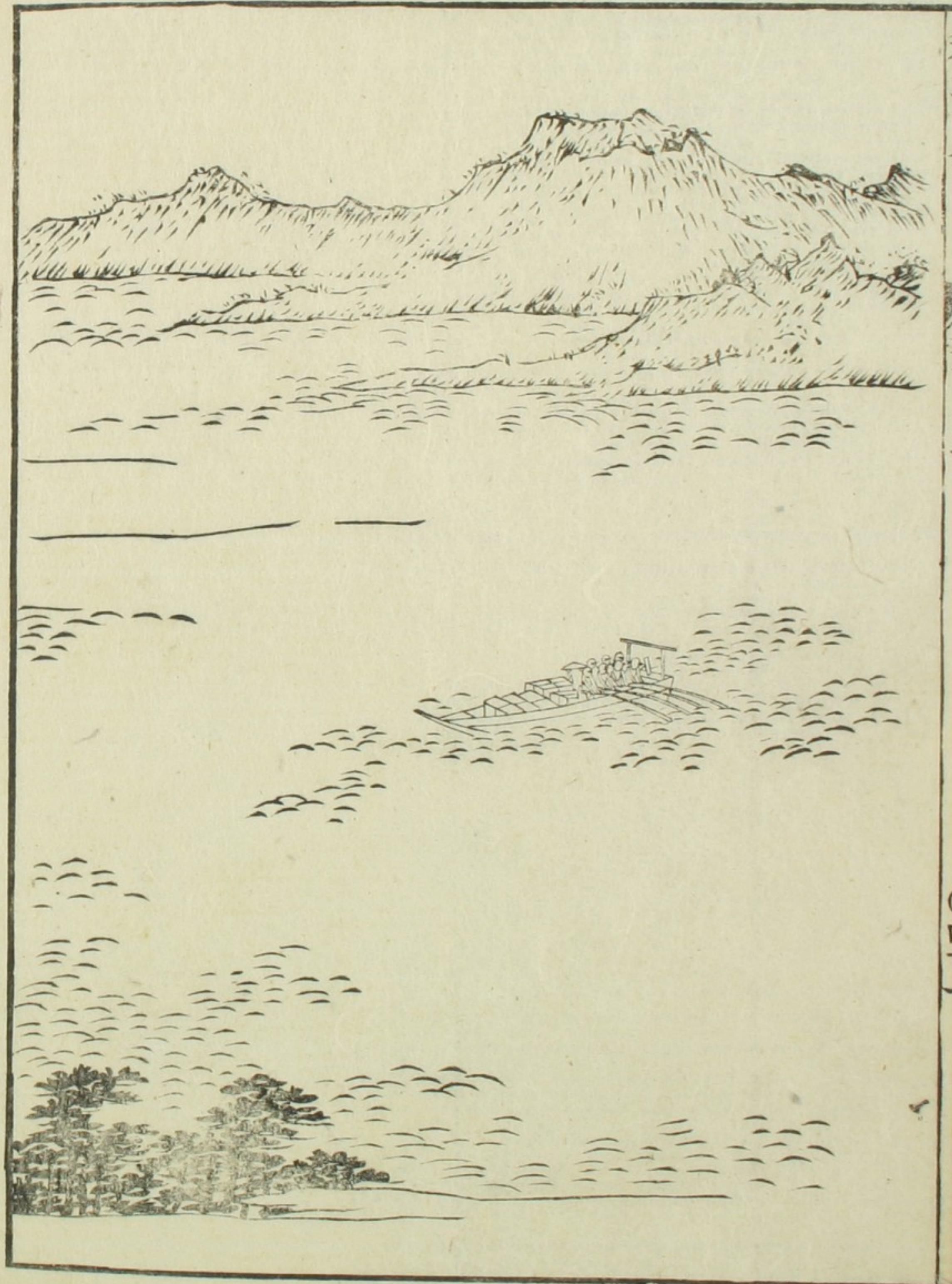
早鳥船圖



中興公明集

卷之三

四十五



中興公明集

四十六

ありそを舟とも云へきう又わそハ少きなり何ぞ
 のとありと云ふはよめるもやハ少き舟は東と一舟
 とあり万葉経に曰くさとりと云ふ舟なり季吟曰
 舟き文とりかとりと云舟なりとりとりと云うく
 文と云舟と云へ一今舟きとりて彩画ける舟
 是少文と云又花少文と云舟は少文と云舟
 と云なり 本邦にも南海は多し一舟は少文
 と云ふも云ふはうく強うなり一

赤曾保舟

万葉 高市里人
 旅あり

おひひーまきよ

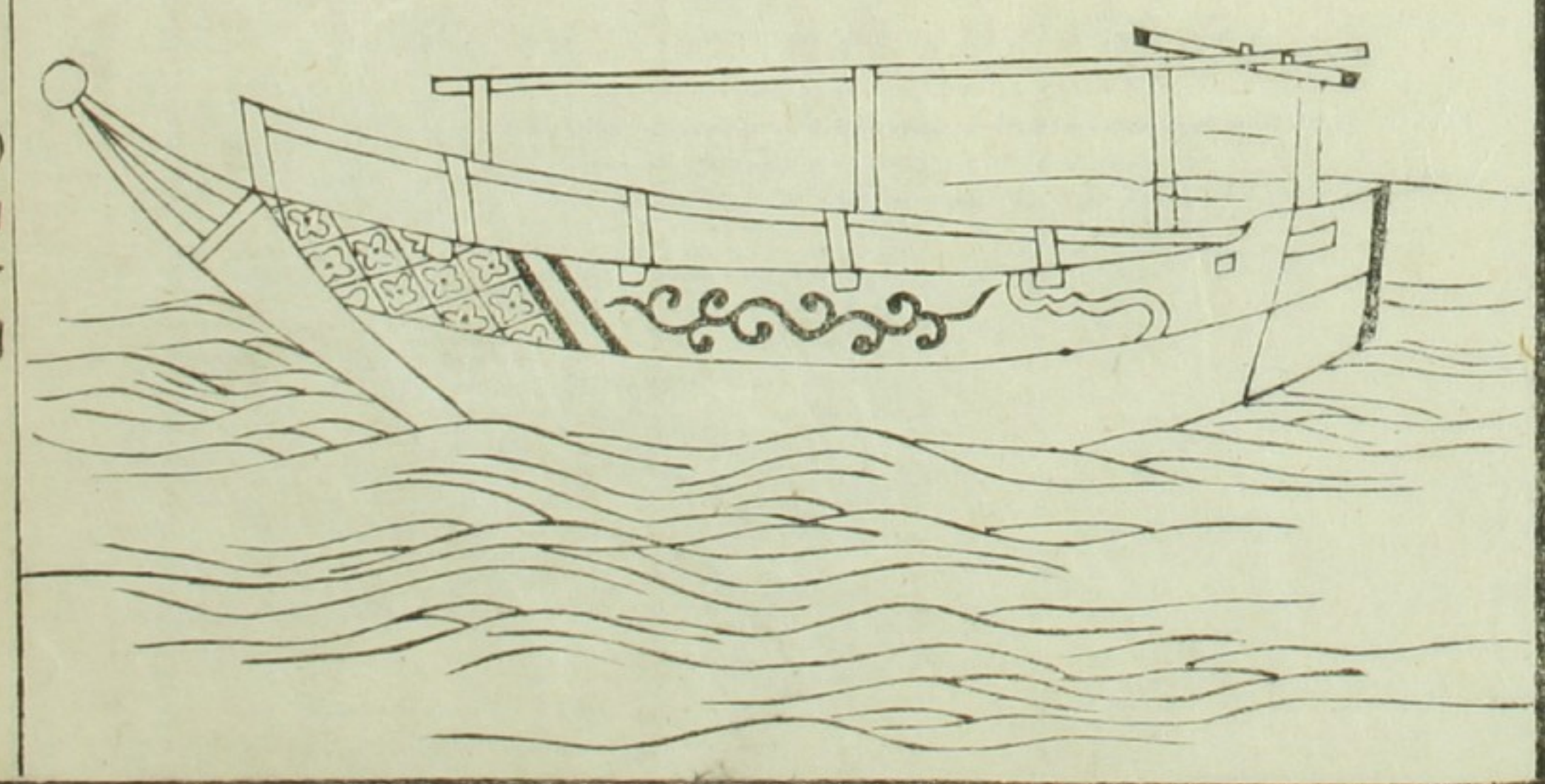
ふみーの

あけの

多保舟

あきん

あー
ん



伊達小早

夫亦

紅毛の船

あひまも

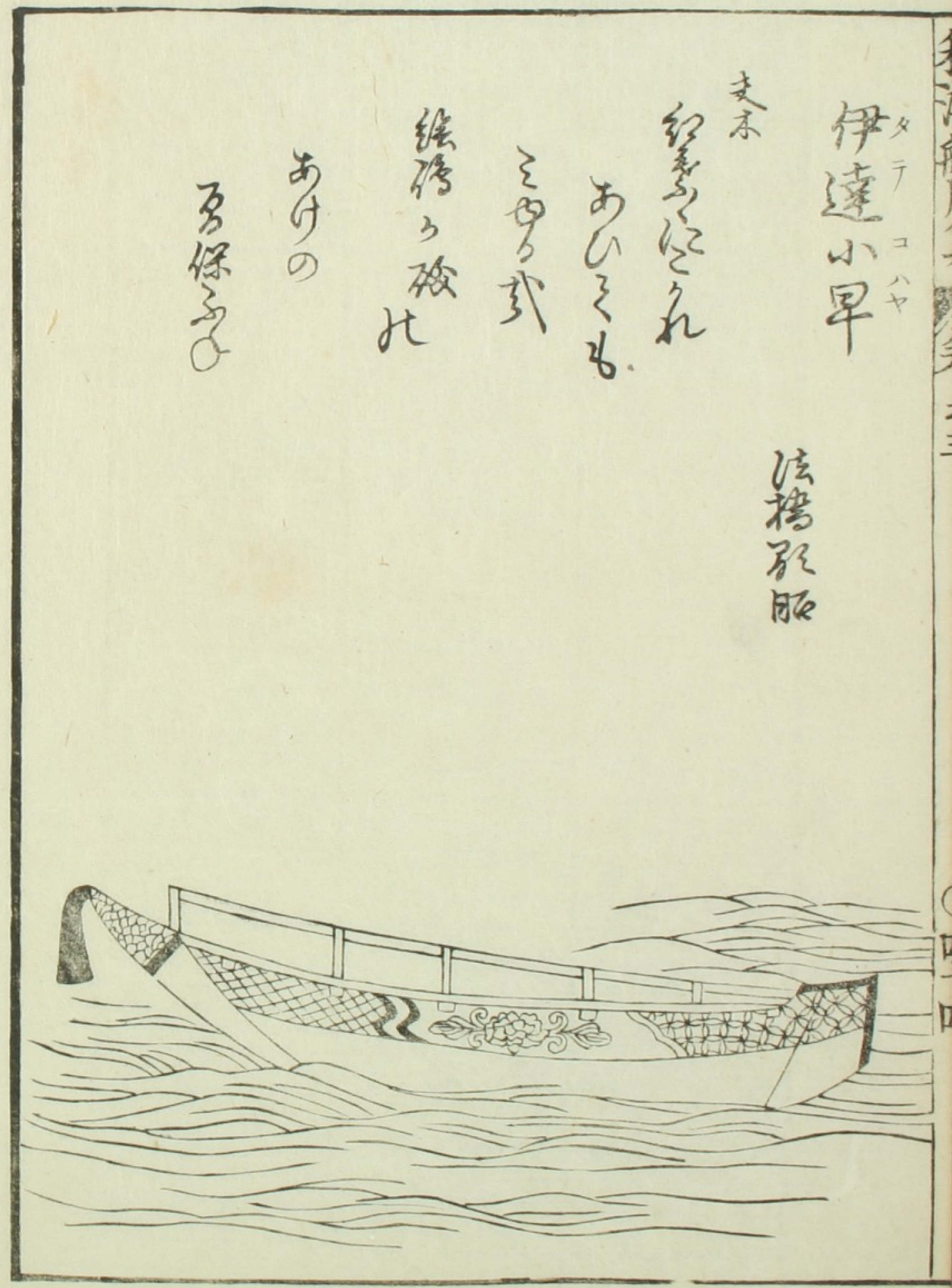
と申す

船の破れ

あけの

る保子

法橋の船



鯨舟

クシラ子

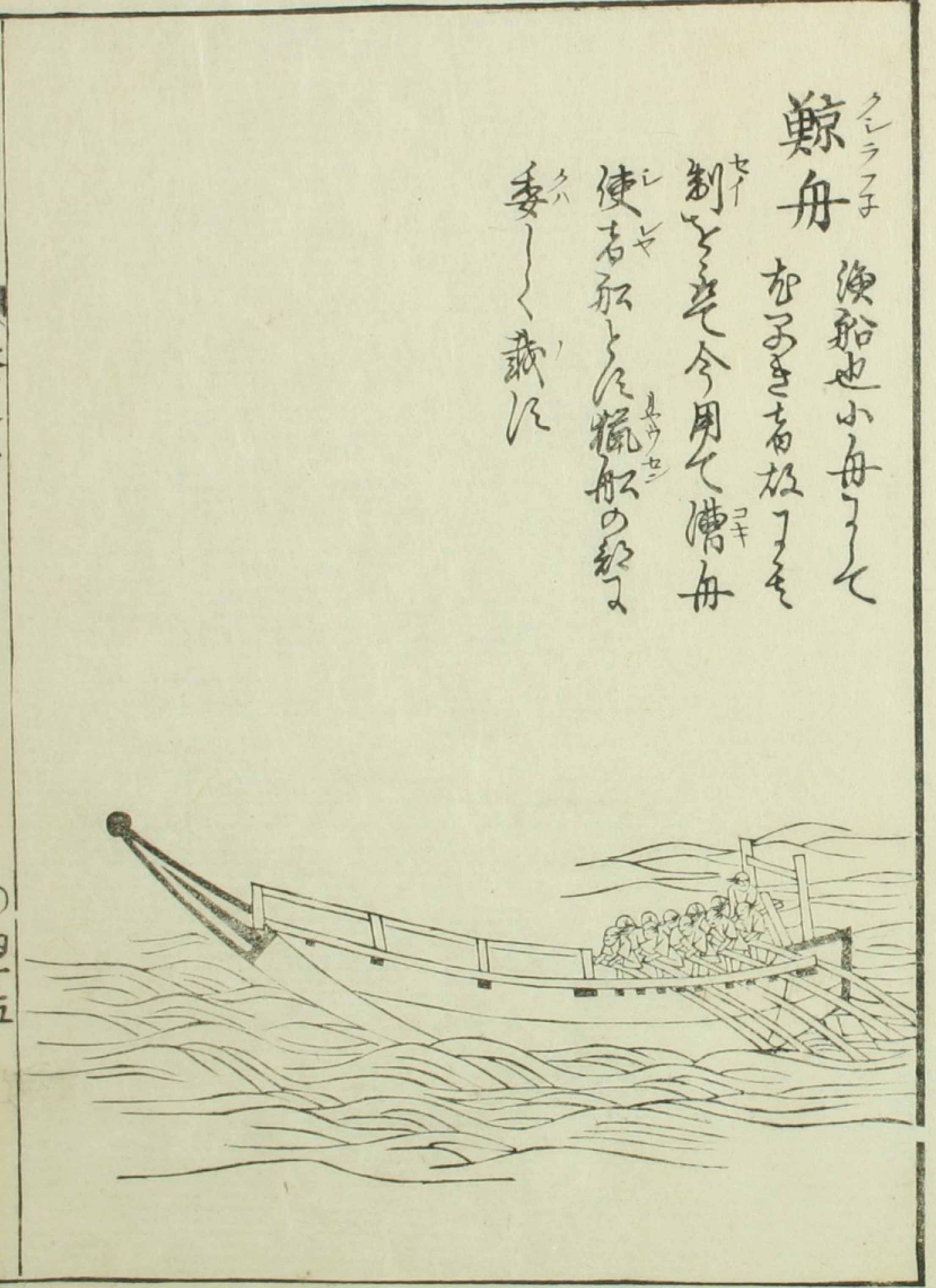
漁船也小舟にて

かききき者故りて

制とて今用て漁舟

使古船とて漁船の船

委しく裁は



喪船

古事紀曰息長帶日賣命於倭還上之時因疑人心一貝喪船御子載其喪船先令言漏之御

子既崩其弟忍熊王不畏其態與軍待向之時赴

喪船將攻空船尔自其喪船下軍

吊使船

賀使船

日本紀曰舒明天皇崩御皇極天皇即位二年十月

新羅吊使船與賀騰極使船泊于壹岐嶋

和漢船用集卷第三終

